
CHI - TO ADVENTURE

架空奇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHI - TO ADVENTURE

【コード】

N01870

【作者名】

架空奇人

【あらすじ】

ある少年がゲームにダイブしてしまい、それからチートを使っているようにクリアしていく話。

〜キャラ紹介?〜

・カガミリユウナリ
火神龍也

年齢 12歳

性別 男

身長 165センチ

体重 40キロ

爆我の持ってきたゲームのせいでゲームの中に取り込まれる。運動音痴でバカだったが、ゲーム内では運動が得意という設定になっている。現在仲間達と冒険中。最初はスラッシュと名乗らさせられるが、すぐにその設定は破棄された。

・キンオウバクガ
金王爆我

年齢 12歳

性別 男

身長 142センチ

体重 35キロ

龍也がゲームの中に取り込まれた原因。金王グループの社長の子供だが、その風格は0に近い。

・サラリーマン達

飲み屋でストレスを発散していたところで龍也にやられる。後に仕返しをしようとするが結局負ける。

・タキタクヤ
滝拓也

年齢 15歳

性別 男

身長 153センチ

体重 51キロ

捕まっていたところを龍也に助けて貰う。無理矢理仲間になれる。
現在は怨双軍団の仲間。

・竜谷霧舞 リュウコクキリブ

年齢 12歳

性別 男

身長 158センチ

体重 54キロ

猛獣士のまつえ。子供の世話が上手だが、拓也には敵対心をもっている。

・キングファイター

戦闘用ロボット

・博士 本名 カノミカイツ 嘉野箕魁津

ロボットを作る博士。龍也達にやられる。

・早瀬卓郎 ハヤセタクロウ

格闘技などの天才。子供のころは勉強が異常なくらいできなかった。
テストの平均点 7・3点。

・トサチ

龍也達を雪山で助ける。賦族を作った人。

・賦族

何人かの中学生を集めた族。

・河山隆 カワヤマタカシ

年齢 25歳

性別 男

身長154センチ

体重57キロ

謎の笛を使い、動物や人を苦しめることができるが悪用はしていない。龍也の仲間。

・怨双軍団

音を操る軍団。

CHI・TOなダイブ

俺は火神龍也。イケメンで頭もよく、スポーツ万能で今まで人に負けたことがほとんどない人間、の反対のような人間だがゲームでは誰にも負けない。学校では何をしても下から数える方が圧倒的に早い。しかし、ゲームをすると、誰にも負けない。俺は最強だ。

今日もウンザリな学校に登校する時間がきた。家から出てすぐに友達にあった。

彼の名前は金王爆我。彼はどこにでもいる普通の子供、に見えるのだが実は誰もが一度は目にしたことのある金王グループの社長の子供だった。金王グループはゲーム開発からデパート経営までなんでもトップな超一流社だった。

彼と学校にいつも一緒に行ってるのだが、着くまでに様々なやりとりをした。「新しいゲーム開発してない?」「父さんからこつそり持ってきたよ。」「今日の帰りにやつてこようよ。」「じゃあいつもの公園で今日もやるかあ!」とこのような話をしているうちに学校についた。いかにもお坊っちゃんのようなだろうと思うかもしれないが、それは違った。爆我は格好は普通の人だし、持ち物や態度も極普通だった。さらにはクラスメートで金王グループの息子ということを知っているのは俺だけだった。学校にはいつものようにチャイムと同時に着席できる時間についた。

そして朝の会を終え、一時間目が始まった。ちなみに今日は一学期最後の日。一時間目の内容は一学期の反省だった。俺も爆我也も優等生の反対のような人だったので二人とも反省点は?という質問には全部と答えていた。また、良かった点は?には、ないと答え、他の人の三分の一程度の時間で終わった。二時間目は終業式。さらに

俺はなぜか作文を読むはめになってしまった。作文は先生からの点検はなく、一学期の反省と夏休みに向けてのことを書けば良かった俺の番がきた。「四年二組火神龍也。俺の反省点は大きく分けて2つある。一つは勉強をし過ぎてしまったことだ。1日に30分もしてしまい、ゲームの時間が去年より、25分も減った。もう一つは運動をしすぎた。毎日、学校まで走りながら来たせいで寝ながらゲームをすると遂寝てしまった。夏休みはこれを改善するためにゲームをもっとし、家からでないことを徹底する。」こんな大変なことを言った終業式は終わり、通知表が返された。大変良い、良い、頑張ろうがあり、計40個の項目があった。この時爆我は俺に向かっていた。

「やったあ、36個だ！龍也、勝てるか？」予想外の高さにまわりからはどよめかれた。俺は言った。「余裕だわ。39個だし。」とさらにどよめきは増した。とここで担任の先生が口をはさんだ。「頑張ろうの数が、だよな。」龍也の態度で大変良いが39個もとれるわけはなかった…。今日は三時間授業。これでみんなは帰宅した。俺と爆我は帰宅せずに、三角丸太公園に向かった。

公園の正式名称は山岳公園だった。しかし柵が丸太でさらに公園の形が三角なので、三角丸太公園だった。決して山岳と三角をかけた訳ではない。

公園にたどり着きゲームをつけた。試作品だからか異様な音をだし、電源がついた、のだと思うのだが、俺は違う世界にいた。ちなみにこのゲームは明後日発売で試作品以外はもう完成していた。またアニメをゲーム化したもので凄い人気なのだが、誰よりも早くプレーしようとした。しかし、俺は異世界に連れてこられ、爆我は俺がどこかに消えたから電源をきったようだ。

2日間俺は気絶していた。だが、発売され他の友達とやるために

電源をつけたようだ。爆我をいれ4人で誰が最初にクリアするか競っているようだ。このゲームの初期キャラは変な体質になる実を偶然、口にした少年だった。砂になる少年を選んだ人、体がバラバラになる少年を選んだ人、鉄になる少年を選んだ人がいた。爆我は最初のキャラが俺だった。さつき夢を見てる時に唐辛子模様の実を食べたのだが、それが関係あるのかと思う。一方爆我は自分の思い通りに操作できないことに苛立ちを覚えていた。俺の名はこの世界ではスラッシュというようだ。ゲームの初期設定は凄く弱く、異常に気楽でバカなキャラなのだが通常世界と逆に俺だけは何故か凄く強く、さらには考え深く、天才だった。ここからはゲームの冒険が始まった。本来のストーリーはそれぞれで想像して頂くことにしよう。始まった。俺の名はスラッシュ。誰にも負けない超一流の戦士になることだ！自分では思ってもいないのに勝手に口が言った。俺は何故かいきなり飲み屋にいるサラリーマン達にぶちぎれた。しかし、大人には適うわけがない、というストーリーなのだが、キレた後、手を刀にして、速攻で勝利した。

爆我はみんなと一緒にゲームをしているのに一人だけ違うストーリーで、みんなから改造してるんじゃないのか、と疑われた。しかし、爆我はそんなこと知ってるはずがなかった。

CHI・TOな旅立ち

サラリーマン達を倒してしまい、自分の弱点を知らないまま冒険に旅立ってしまった。途中で何があつたかは壮絶すぎて話せないが、龍也は島に流れ着いた。龍也が目覚まして、この島の探索を始めた。この島の特徴は、ビルが多い、人はみんなスーツで七三分けというくらいだった。龍也は七三分けの人たちに見覚えがあつた。それはあの時に倒したサラリーマンだった。そう、この島はサラリーマン島だったのだ。龍也は探索を終えて、ゆっくりしていると、いつの間にか寝てしまった。目を覚ましてまた何かをしようと思つた。しかし、体が全く動かない。金縛りにあつたのかと思えば、捕まつたのだらう。縄で縛られていた。それは龍也だけではなく、もう一人も縛られていた。周りに人はいないから一人しかいないからか、龍也は話しかけた。「お前なんで縛られてんだ？ワリイことでもしたか？？」

するともう一人は答えた。「したから縛られてんだらうが！！」龍也はコレを聞いていった。「ワリイことはしちやあいけないな。」さらに会話は続いた。「オメエもしたんだらうが！！」「オレは何も悪いことはしちやあねえ。絡んできたサラリーマン達をぶつ潰しただけだ！！」「立派なワリイことだ！！つーかそれが悪くねえんならオレだつてしてねえよ！！」「お前何したんだ？」「オレらの街に井戸があつた。それをいきなり壊してサラリーマンの銅像を作りやがったんだよ！！それでム力ついて殴つた。」「そんなの何もわるくねえな。」「つーかお前誰だよ。」「???あ・オレ?」「周りに誰かいるのか?」「いるじゃねえか。ほら銃を持って構えてる。あ・オレは龍也だ。お前は?」

「拓也だ。てか名乗つてる場合じゃねえーよ。オレ達殺されるんだぞ??」「じゃあ縄切るか???」

「お前できるんなら最初からやれよ！！」初めてあつた二人だった

が、ある意味上手く会話が続けていた。その時、サラリーマン達は銃をはなつた。それと同時に龍也はなぜか拓也の前に自分の縄を切つて立つていた。拓也は目を閉じてしまった。『カキン、キン、カキン』何度も鉄にと鉄がぶつかったような音がした。その音を聞き、拓也は目を開いた。そこには信じられない情景があった。それはなんと、龍也の体が全て鉄になつていて、それで銃弾を斬つたり叩き落したりしていたのだった。そして龍也は一気にサラリーマンに近づき瞬殺した。

龍也は倒し終わつた後言った。「縄を切つてもらいたければ、オレの仲間になれ。」拓也は仕方なく「仲間になつてやるから縄を切れ」と言った。龍也は切りながら、「縄を解いて欲しいんなら仲間にならなくても良かったけどね」とつぶやいた。切り終わつてまた会話が始まつた。「おい！お前の体あれなんだ！」「なんか変な実食べたら鉄になれるようになった。」「そういうことか。で、もうひとつ。なんかさつき縄解いてほしいなら仲間にならなくてもいいつて聞こえたんだけどそれなんだ？」「ああ、オレの本音。」「……。」「まあ仲間になつたんだし、冒険行くぞ！」「……。」「なんだよ。そこはおお！！だろ。」「こんな感じで会話を終え、旅に出た。しかし、ここは海に浮かぶ孤島。船で出ようも船はないから生えてる木でイカダを作つて出発した。

一応言つておくが、最初にあつたこつちの世界では考え深いとあつたが、そこだけはもともといた世界とココだけは変わらなかつたようだ。

一時間後、他の島の砂浜付近にゴミと一緒に浮かんでいた。予想がつくと思つから説明はしない。

そしてさらに一時間後、海に遊びに来た子供達にお腹の上でジャンプされていた。それが良い感じに水を吹き出して、二人は起き上が

った。「ココはどこだ?」「しらねえよ。島だろ。」「知ってるのに嘘つくな。」「拓也は反抗するのも面倒臭く感じたのか、会話は終わり、すぐ側の森の中へと入っていった。森の奥にいくと一つの洞窟があった。二人は躊躇なく、中に入った。しかし、なかから大勢の動物達が襲ってきた。それに歯向かい必死に洞窟の中へと進んだ。するとそこには一人の男がいた。龍也は話しかけた。「お前危ないな。」「その男は無視した。龍也に話しかけられた時に仕方なく返事したのにしないやつがいて拓也は少しキレ口調になる。「おい!お前!もしかして猛獣士のまつえか!」「普段からこんな口調だった気がする・・・。そんなことは置いておくことにしよう。その男は猛獣士という言葉聞いて、表情が変わった。そして返事をした。「お前ら猛獣士を滅ぼす者達の仲間か?だったら容赦しないぞ!」拓也は言う。「イキナリ攻撃してきてお前危ないとか言うよ。うなやつが滅ぼす?そんなこと考えてるから滅びるんじゃないかねのか?」「龍也は止めようとするが、二人は戦い始めようとする。しかし、洞窟の奥から子供達が出てきて二人共戦いをやめる。それをみて男は敵ではないと判断したのか、会話を始めた。「お前達名前を何と言う?」「オレは龍也。」「オレは拓也。お前は?」「オレは霧舞。」「お前仲間になれよ。」「誘うのオレだけじゃねえのかよ!」「無理だ。ココの子供達を守っていかなければならない。」「そんなの拓也がやってくれるよ。」「それならいい。」「おい!お前オレ誘っておいて、何考えてんだよ!」「お前の友達は嫌なようだが。」「ここで子供達も会話に入ってきた。「霧兄」。オレ達はもう霧兄がいなくても生きていけるよ!だから霧兄と一緒に行きなよ!」「それはダメだ。」「せっかく行ってもいいと言ってるんだから来ればいいのに。」「霧兄なんていららないんだよ!」「・・・。」「みただいぜえ!居場所がないようだが、お前も来いよ!」話はまだまだ続き、結果的には仲間になることになった。拓也の霧舞は洞窟からでて、近くの街へと出発しようとした。龍也は一人子供達と話を少ししていた。話が終わったのか、龍也は洞窟からでて

きて、三人は街へと出発した。しかし、今街はキングファイター達に占拠されていた。そんなことも知らず、三人は街へと向かうのであった。さらに、三人は街に着く前にその状態で動けなくなった。

爆我は操作しなくても進んでしまう内容に途惑っていた。しかし、新手の動画を見ているような気分で少し楽しそうでもあった。だが、またゲーム機の電源を切ってしまった。だから動けなくなったのだ。

CHI・TOな街

約二分後、ゲームの電源がまたついた。爆我はトイレに行くために電源を切っていくという習慣があったのだ。普通はトイレの時には消さないが、それは個々だと思っからおいでおく。

そのころ龍也達、三人は街へと少しずつ近づいていった。街が見えるところまで来て最初に荒れ果てた地と子供がキング・ファイターに蹴られているのが目にはいった。それを見た龍也と霧舞はすぐに近づき、子供を少し離してから、キング・ファイターを1:2でフルボッコした。それを見た子供は、再び泣き出してしまったのだが、霧舞が意外すぎる優しい声で子供に何かを言ったのか、子供は泣きやんだ。その後、子供の案内で子供の家に入った。入るとすぐに母親が泥、傷だらけの子供を見て三人に「ウチの子供に何するんですか!!」と叫んだ。龍也と霧舞が助けたのだが、それを言うても信じてもらえなさそうだったので、言わずに外に出ようとした。霧舞と龍也を子供が止めた。ちなみに拓也は二人が止められて、止まったので仕方なく止まることにした。その後母親から謝られて、お礼も言われた。それを見て、拓也は凄く偉そうにしたのだが、母親はすぐにお前には言っていないみたいなの顔で拓也を睨みつけた。その後、キングファイターはロボットでそれを作った博士がボスだということやキングファイターに占拠されていて、凄い迷惑をしていることを聞いた。

それを聞いた三人は相談した後、その博士を倒しに行くことを決めた。家から出るとそこはキングファ・・・ロボットに完全に囲まれていた。霧舞は森から動物達を呼び一気に倒し、龍也は体を鉄にして、こちらもまた一気に倒していた。その時、残り一人・・・一機が拓也に襲い掛かった。拓也に取柄がないと思っていた二人は自

分達に敵がないのに、もうダメだ・・・と思いながら見ていた。だが拓也は靴からサッカーボールを出し、靴についているPOW調節でPOWを最強にして効率が悪いのだが何回もボールを蹴ってぶつけてようやく倒した。二人はがんばっている拓也を見ながら効率悪くなどを話しながら笑ってみていた。

その頃博士は超小型カメラで三人の戦いを見て、対策ロボットを作っていた。龍也対策に超合金ゼッタ・イキレ・ナイという素材を使って、霧舞対決には景色と同化する機能をつけ、匂いも漏れなくした。ちなみに拓也対策はなかった。設計図はなしで頭の中で考えた形のをすぐに作り始めた。

博士が作り始めてからだいぶ経って三人は博士のいる塔の前についていた。その行く手を阻む5機のロボットがいた。そのロボットはいさつき作りはじめた対策ロボットだった。この短時間で5機もつくれる技術には驚きだ。そして三人はさつきと同じことをして倒そうとしたのだが、対策をされているだけであってぜんぜん倒せなかった。そこで三人は合体技を考えた。できるかは全く分からなかったが、龍也は拓也の靴とサッカーボールを鉄にしようとな念を込めた。その時、精霊がでてきた。精霊から質問があった。「貴方達は能力の共有を誓いますか?」二人はすぐに誓うといった。すると、靴とサッカーボールが鉄になった。拓也はそれを見て全力で鉄のボールを蹴ったが、重さのあまり飛ばなくて、鉄にするという取り組みは無駄になった終わった。拓也が失敗したが凄いいことしようとしているみたいなききをしている間、霧舞はロボット達の弱点を探していた。その時霧舞の視力6.0の目は0.5mmのボタンを発見した。そのボタンが何かは分かっていなかったが、とにかく押してみた。それを全部のロボットにし終えた時、「10秒後自爆します。」という音声があった。それが聞こえた龍也と霧舞はすぐに離れた。

しかし一人だけ聞こえなかった拓也は普通に爆発の被害にあった。彼は体が丈夫なので大事には至らなかった。そしてロボットは全機自爆したので、すぐに塔の中に入った。中に入るとすぐに小さな布が敷いてあった。龍也は靴の裏をそれで拭こうと乗った瞬間にズルツと滑ってしまった。裏には油があつて、凄い滑るようになつてきたのだ。その後も小さく、そして弱い仕掛けに注意していなかった拓也が何度か引つ掛かったが、すぐに博士のところにとどり着いた。博士は到着した三人を見て笑った。「君たちおもしろすぎるよぉ。まず君。油の仕掛けに引つ掛かったのは君が初めてだよ。そして君36回引つ掛かる人も初めてだよ。まあ面白くはないが、引つ掛からなかったのも君が初めてかな。」最初のは龍也で次が拓也で最後が霧舞のことを言っているのだと思う。なんで知っているんだ。と思うかもしれないが、この塔には100個の監視カメラがあるそうだ。その後、自分の不注意でさらに笑われてしまった龍也は少し怒っているのか、博士を手を鉄にして思いつき殴った。当然博士は気絶した。

塔からでてきた後、三人は今回のようなことがあつたらどうするかを話し合った。今回はロボットで弱点があつたから良かったもの、三人の攻撃が全く効かないことがあつたら絶対に勝てないからだ。結果的には少しの間、個々で修行をして、龍也は鉄の種類増やす、拓也はボールを蹴る以外の攻撃方法をつくる、霧舞は自分でも戦闘できるようにするという目標だった。そして今日から50日修行をすることになった。そして最後に霧舞は言った。「凄い気になつていたんだが、お前達。俺の名前はきりまいじゃないきりぶだ。」二人は凄い驚いた顔をしたが、とりあえず分かった、ということになった。そして三人は一時的に別々になり修行を始めた。

CHI・TO な修行

三人は修行を始めた。それぞれ自分に必要なことを考え、それを身につけるために必要な場所や道具を見つけ修行を開始した。

龍也は鉄の種類を増やすのが目的だったのだが、ちっとも何をしたらいいか分からず、悩んでいた。そこでまずは自分の体の鉄を自由に変形させられるようにしようと考えた。しかし自分の体なだけあって元の形に戻るかは分からないのが不安だった。そこで近くにあった手拭いを鉄にして高温で熱した。普通の鉄なら溶けてしまうのだが、なぜか鉄は溶けずに、柔らかくなった。鉄が柔らかくなったのが分かり、早速龍也は触って確かめた。「熱っ！！」大きな声が響いた。鉄の熱さはないからいいようだ。鉄には龍也が触った指の跡があった。修也はひとまず鉄を冷ますことにした。人が触れる程度になり修也は再び触った。しかしこれは本来の鉄と同じように形が変わらなくなっていた。そして元の手拭いに戻して、見るとさつきついた指の跡はなく、鉄にする前との変化は全然なかった。小さな傷なら元の状態に戻るようだ。続いてまた手拭いを鉄にして、柔らかくした後、冷める前に半分にした。当然手などではやってない。そして冷めた後、元々手拭いだっただけは二つの丸い鉄になっていた。龍也はこれは流石に戻らないだろうなあと思いつつ、手拭いに戻した。大きく切れてはいなかった。しかし、無傷でもないようだ。手拭いの糸が数本切れていた。大きな傷だと少しはダメージを負うようだ。それが分かって龍也はやめるのかと思ったのだが、自分の左手を鉄にして熱した。手は焼けるように痛かったが柔らかくなるまで頑張った。柔らかくなって、腕の形を変えてみた。痛くはなかった。しかし何か衝撃が腕から全身に走った。龍也は変形した鉄の腕の鉄を解除した。腕に傷はなかったが温めたせいで火傷になっていた。龍也は少しの間腕を冷やしてからまた修行を始めた。腕を鉄

にしてさつきと同じ状態にする方法を考えた。結果から言うと鉄にする腕の温度を上げると鉄にした後、柔らかくなるようだ。さすがゲームだ。すぐに腕の温度を自分の意識で温めることができるようになった。ちなみにこれを発見するまで、鉄にする前に腕を揉んで柔らかくしようとしてみたりした。ある意味変なことをやって良かったのかもしれない。石を鉄の状態で叩くということを思いついて、何度も叩いていて、いきなり解除されてしまった時、そのまま叩いてしまい、手が熱くなった。そのまま鉄にしてみると、柔らかくなっていたのだ。そして龍也は手を剣など色々な武器の形などにできるようになった。また、物も自分の熱くした手で少し温めれば変形自在な鉄にできるようになった。鉄の形が変えられるようになって龍也の修行はひとまず終了した。

一日で一つの事を身に付ける事ができた龍也、逆に見れば一日に一つでやめた龍也、他の仲間達とはどう差がつくのだろう。ちなみに三人は相手の頑張りを想像するというために修行の間会わないことにした。

一方、その頃拓也は自分に出来る攻撃技に何があるか考えていた。悩み続けて一時間も経った。そして決まったことは、大きく分けてキックとパンチという普通すぎる技になった。細かく説明すると、キックはただの蹴りでもサッカーで鍛えた強い蹴りを活かすことができるようにし、身体能力をあげて空中でも蹴れて、連続蹴りなども習得しようとしていた。まずは拓也は前半は蹴りの技を極めようとした。まず、拓也が習得しようとしたのは飛び蹴り、ひねり蹴り、かかと落としだった。拓也は自分流で修行を丸一日終えた。翌日、早朝から修行を始めた。一時間くらい経った時、拓也はずっと見ている老人に気がついた。「何見てんだよ！」といきなり怒りだした拓也。偶然通りかかった人たちに拓也は見られた。何か冷たく可哀想とでも思っているかのような目だった。拓也は良く分からなかったが老人が相手なのにも関わらず怒ってか近づいていった。もしか

拓也は老人を倒すつもりなのか、そう思ったが、拓也が老人のすぐ側まで来た時、老人は予想外の素早さで拓也の腕をとった。そしてすぐさま背負い投げをして、拓也は受身も知らなかったので、思いっきり地面に叩きつけられた。背中への衝撃が激しい。一瞬、背中をうって呼吸までもができなくなつた。この時、拓也はさっきの目はオレがやられるからなのか、など色々なことを考えていた。少し経ち回復した後、拓也は老人に話しかけた。「あんた何者だ・・・」それを聞いて老人は「人に名を聞く前に自分が名乗りな。」と答えたのだが、拓也は名前は聞いていなかった。それにさっきの動きに比べて声は老人、そのものだった。「オレは拓也。あんたは？」「早瀬卓郎だ。」「あんたはなんでそんなに強いんだよ。」「あんたなんて人はいない。早瀬と呼べ。」「早瀬、なんで強いんだよ。」「年上を呼び捨てとは何だ。」「すまねえ。早瀬さん、なんで強いんだよ。」「オレは昔、色々なものを極めた。空手や柔道、ムエタイなどだ。」「す・すげえ。」「この大陸では一番空手が強かつたはずだ。昔はな。」「今も十分強そうじゃねえか。オレ今蹴りとかの練習してるんだが、教えてくれねえか？」「人にものを頼む態度か？」「教えてください。」「いいだろう。でも何を教えるかによるがな。」拓也は会話がスムーズに進まなくてイライラした。また所々、耳が悪いのか、聞こえないなど言われて大きな声をだしたらうるさいと言われ、さらにイライラしていた。しかし、自分の修行の手伝いをしてくれる人ができて、他の二人に少しは追いつけるんじゃないかと考えていた。そしてそれから、走りこみとキントレの日々だった。メニューは15km走つた後、5分休憩し、様々なキントレをした後、ようやく教えてやると言われた。早瀬は自分の教えたいことしか教えないようだった。初日は相手のどこにでも蹴れ、空中にいても蹴れるようになるように教えてもらった。拓也は相手をただ蹴るだけということにすらなさを感じていた。二日目、回し蹴りと柔道の技を教えて貰っていた。初日と同じくキントレなどはやらさせられた。回し蹴りは拓也はもうできるようになってい

るつもりだった。しかし、早瀬に足の動きが微妙に悪いなど言われて、直したくもない蹴りを直すはめになった。拓也は毎日イライラが増していく。それだけの状況だった。

だが、しっかりとした修行や教えてくれる人もいる拓也は一気に成長するんじゃないか、そう思う。だが、拓也は自分のやりたくないことをやらされるのが、何よりも嫌いだった。そこは欠点になるかもしれない。

そのころ霧舞は、射撃技を身に着けようとしていた。小さい頃から、落ちてる木の枝を拾ってゴムなどを使って、パチンコのようなものを作ったりして遊んでいて、射撃などは凄く得意だったからだ。初日、元々いた森に戻って、子供達に手伝って貰い、大量のあまり大きくない石と木の枝を集めておいてもらった。その間、霧舞は街で色々な種類のゴムを集めた。そして、木の枝とゴムでパチンコのようなものをたくさん作った。強度はまあまあだったが、多くの数のパチンコを全部違うゴムの種類で作った。そしてまずは、少し離れた所と結構離れた所に一回ずつ、全てのパチンコで打っていった。そして、近くの方に打った時に一番強かったゴムと結構離れた所に打った時に一番強かったゴムをとり、そのゴムを買った店に行き、少し太めのゴムを作って貰った。そしてその後完成したゴムを持って、武器屋に向かった。お店の前には何でも作れる完璧な武器屋・黒兎と書いてあった。そしてその店の中に入り、ゴムにあった、パチンコを作って貰おうとした。その店の主人は作った事がないのか、「えっ。」とつい口に出してしまっただが、霧舞の「何でも作れる武器屋なんですよ。」と言ったからか、すぐに裏に行って作り始めた。1時間後、霧舞は全く同じ姿勢で微動だにせず、待っていた。そして、パチンコが完成した。見てすぐに分かることは、鉄製というのと凄く変わった形ということだった。全体は鉄でできていて、ゴムをつける所は円状になっていて、その鉄でゴムが押さえささっていて、使えるようになっていた。ゴムは近くだと強い方を横に

かけて、遠くだと強い方を縦にかけた。その合わさる所に弾を設置するような板があった。案外使いやすそうだった。だが、実際戦闘で使えなければ意味がないと思い、森に戻り柔らかいボールを子供達に逃げて貰ってぶつけてみることにした。もし当たって怪我をする、そんなことがなければいいがと思っていた霧舞だが子供達が乗り気だったので始めた。子供達は木も登れるので地面を走り回ったり、木の上に登ったり、結構早いスピードで動いていた。そこに霧舞は狙ってボールを打った。もともとパチンコが上手かっただけあって、一発で当たった。ボールが柔らかいということもあったが、弾は当たっても普通の物だと全然痛くないと考え、特殊な弾を作ることにした。そして、4時間考えた結果、煙幕、硬い弾、そして爆発するような弾が最低限、あると良いと考えた。そして、ひとまず案ができたので翌日に向けて寝た。

霧舞は元々の特技を戦闘に活かすという考え方だったが、それが上手くいくのかどうかは分からない。しかし、動物がいない時にも戦う能力は少しは付いて、動物のいない所でも戦えるようになるかもしれない。

CHI・TOな再会

そして長い50日の半分を超した30日目の修行を終えた。三人は時間は違ったが、それぞれ寢床に入り、睡眠をとろうとした。31日目の午前2時。街がいきなり騒がしくなった。街の側で修行をして眠っていた、龍也と拓也はその騒がしくなったのを聞いて、龍也は「なんだ？」と拓也は「うるせえなあ。」と外に出た。外を見ると、何か見たことがあるようなロボット達が街の人達を一箇所に集めて、家を一齐に燃やし始めていた。龍也のいる家は半分焼けていたが、龍也に傷はなかった。そして、二人とも同じ場所にいた訳でもなく、連絡をとった訳でもないのだが、ほぼ同じくらいにロボットを倒し始めた。拓也と龍也は同じところで戦っていて、相手の成長に驚いていたが、まずは自分の敵を速く終わらせることにした。以前の三人の力を研究して作ったのか結構簡単に倒しきることができた。しかし、火を消すのは水を運ぶしかないと考え、街の人と水を運び始めた。その少し後、霧舞が到着した。すぐに水を運ぶように拓也に言われたが、霧舞はパチンコをだし始めた。いきなり弾をセットして飛ばしたら、その弾は建物上空で割れ、少しの水が出てきて、弾の中身を包んでいたものと一緒に落ちていった。それは当然消えるわけがなく、拓也が怒りを押さえきれない様子で叫んだと思ったら、すぐに霧舞に飛びかかろうとした。それと同時に雨が降り始めた。空には雲はなく、珍しいくらい晴れていた。それを見て、霧舞以外は何が起こってるのか分からない様子で雨によって火が消えるのをポカーンと見ていた。火が完全に消えた後霧舞が空にまた何かを打ち上げたかと思うと気づいた時には雨が止んでいた。その後三人は偶然会ったのだからそれぞれの修行の様子などを話し合うことにした。

「まずは拓也、修行の状況を教えてくれ。」

「オレが早瀬さんつつーおっさんが色んな武術が強くて、そのおっさんから色んなことを教えてもらった。できることは20〜30は増えたはずだ。」

「次に霧舞。」

「オレは昔得意だったパチンコで武器の作成をした。パチンコは遠近両用で結構な威力はあるはずだ。弾の種類も結構な数がある。」

「お前から結構頑張って修行したんだな。」

「霧舞！！さっきの雨を降らしたのはお前か！？」

「そうだが、何かあったか。」

「もつと早くお前がきて雨を降らせば、無駄な労力を使う必要がなかったんだよ！」

「オレは森の中で修行していたんだ。仕方ない。」

「二人とも喧嘩をするな。ところで霧舞。その弾にはどんな種類があるんだ？」

「普通の硬い弾と煙幕がでてくる弾と爆発する弾と雷、地震などの災害を起こす弾だ。他にも色々ある。これは簡単には作れなくて、作ってくれた職人にしか作れないそうだからストックとして、今は洞窟に約200個ずつ置いてある。それを全部あわせたら今後移動時に運べる量じゃないから、後で龍也に相談して、必要な弾と運ぶ方法を考えようと思っていた。」

「分かった。それは後で洞窟でゆっくり考える。」

「二人で話しすんな！それで、龍也は何ができたよ？」

「オレは鉄の形を変える、物を鉄にする、磁力を持った鉄にする、など鉄に色んな特徴を持たせることができるようになった。」

「それは大きな進歩だな。」

三人はそれぞれ出来るようになったことを確認し終えて、三人とも十分な進歩があったということ、再び旅立つことにした。だが、その前に霧舞の弾の量が多い、という大きな問題が残っていた。三人はすぐに洞窟に向かった。以前より何かせまくなったような気が

した。入り口には弾がないと思ったが、霧舞が「これ全部だ。」と言った。二人は心のなかで「えっ」と思ったが、周りを見渡した。何か入り口の横幅が狭いと感じたのは壁の両側に弾がずっさり積んであったからだ。表面にでているのだけで推測1000個はあった。「これ、全部で6420個だ。」霧舞は突然言い、二人はその量の多さに少し驚きを隠せない様子だった。霧舞が言うには今の状況では弾は種類ごとに分けられているが、もしまとめてしまえば、どれが何の弾なのか分からないそうだ。そこで拓也はここで修行している途中に見つけた、圧縮鞆屋という場所があることを怒っているのか、という口調で教えてあげた。そこで三人は一度、圧縮鞆屋に行った。そこにはサイズは煙草が3箱くらいしか入らないような靴しかなかった。だが説明書きには森の木10本まで入ります。そう書いてあった。龍也と霧舞がよく分かっている様子だったところに店員らしき人が寄ってきて、どのくらいのサイズのものをいくつくらい必要か質問してきた。霧舞はとりあえず直径6cmの弾が1000個入るのを7セットもらうことにした。そして、すぐに紙袋に入ってできたので、途中に革の少し太めの紐を2本買って、再び洞窟に戻った。そして三人で手分けして弾の種類ごとに袋詰めし始めた。約5分作業をしてあたり、で龍也は手早く詰めていて、ノルマの2袋のうち、1袋を終えた。霧舞は3袋をすでに詰め終えていた。龍也は残り一袋、霧舞はもう終わっていた。もう一人の拓也は、まだ一袋も終わっていないどころかようやく100個くらい入れ終わったところだった。拓也は自分だけ遅いのに気づき、「なんで霧舞のを手伝ってのに霧舞は終わって他の人のを手伝わねえんだ!!」と叫んだ。なので霧舞は拓也の袋を一つ手伝うことにした。さらに5分経ち、龍也と霧舞の二人は完全に役割を終えていた。なので二人は買ってきた紐に袋を付けて、ベルトのようにして装着する方法を考えていた。凄く遅い拓也は今だにようやく500個を入れ終えた状態だった。1時間後、拓也は全パワーを使い切り、疲れきれた様子で地面で眠ってしまった。二人は拓也が寝ている間

にその紐を色々工夫して、全然とれないようにし、修行からの旅立ちへの準備がすっかりできた。そして、三人は今日はもう寝る事にした。

そのころ、爆我はゲームをしているつもりなのに、何か動画を見ているような気持ちでただ操作もせず、画面を見ているだけだった。だが、爆我はようやく龍也の顔が何か見たことのある顔ということに気づいて、さらには初めてゲームをつけた日、あの時に急にいなくなったのは完全に開発されていなかったゲームの故障でゲーム内に取り込まれてしまったのではないかと、と凄く心配になっていた。その緊張を煽るかのように、爆我に龍也の母親から電話がかかってきた。「もしもし。」「龍也の母だけど・爆我君??」「はい、そうですけれど・。どうかしましたか?」「昨日から一度もうちの子が帰ってきてないんだけど爆我君何か知らない??みんな爆我君と一緒にいるんが最後に見たのだ。って言ってるんだけれど。」「知らないです。でも終了式の日に公園でゲームをしようとしたら、電源をつけて気づいたらいなくなっていました。」「そうなの・。学校と警察にも連絡してみるわね。何か分かったら教えてちょうだい。」「分かりました。あとお母様も何か分かったら、凄く心配なので教えてください。」「分かったわ。ではさようなら。」「さいなら。」「

爆我は「え・。誰??」「みたいになるように誰かの親と電話する時には態度が変わった。しかし、ほとんどの母親が電話では凄く真面目な子だけれども、学校での態度はひどい、ということを知っていた。なので今日言った事も信じてもらえてなく、親の間では爆我の家で隠れてるんじゃないか、などという噂が毎日のように流れていた。爆我も自分が信じられないことに薄々気づいていて、少しでも早く、戻ってきてほしい、少なくとも始業式までには帰ってきてくれないとオレが警察までも疑われるかもしれない、など色々な心配や願いをしていた。しかし、ゲーム内から地上にでるため

にはゲームを完全コンプリートしなければいけない。そのことは誰も知らなくて、現実世界で2ヶ月いないにしないと一生戻って来れなくなるということもあった。しかし、道のりは長く全部クリアするには普通の人がプレイしていたら5ヶ月はかかるらしい。これからも頑張らないと無理だし、ちよつとの頑張りでは期限内にはクリアできるかも分からない。それを知らず、爆我は始業式までに戻ってくることを祈っているのだ。

CHI・TOな再会（後書き）

題名に漢字ミスを発見したため編集

2010/11/21

CHI・TOな運命

翌日、三人は再び冒険を始めることにした。次は海を渡る必要はなかったが、目的地につくまでの最短距離は山を越さなければいけなかった。それを知った三人は早く次に進みたいという理由で山を越えていくことになったので早速、山を登り始めた。山の過酷さを知らない彼らはそれが命とりになるかもしれないこともしらず、何も持たずに行ってしまった。最初の方は良い天気で、視界も良く、凄く歩きやすかったのだが、途中からだんだん天候が怪しくなってきた、ついには吹雪にまでなってしまった。視界も悪くなり、周りにはいつの間にか迷子になったのか、木だけしかなかった。だが、三人はあきらめなかった。その諦めの悪い所が仇となり、どんどん奥に入っただけで、ついには遭難のような状況に陥ってしまった。そして熱も奪われていき、普通に立っているだけでも死んでしまうような状況だった。なのでとにかくどこから暖をとらなければならぬと思った三人は側にあった木を何本か龍也の鉄できり、拓也は凄く大きな箱状の形にした。それを龍也が鉄にして、三人はその中に入った。だが周りは鉄。寒さは一向に無くなる。そこで拓也は木の枝を何本か持って来て、箱の中で焚き火の形にした。龍也と霧舞が火もないのに何してるんだろう、と思っていたら、霧舞が拓也にパチンコの火のつく弾で火をつけてくれるようお願いしてきた。それで火をつけ、だんだん暖かくなってきているうちに三人は眠ってしまった。

目が覚めると三人は全く知らない場所にいた。そのせいで三人は途中で雪崩がおこって、雪の中に埋まってしまい、もうダメなのかもしれないと一瞬でここまで想像した。しかし、起き上がると歩くことができ、歩いていると見たこともない40代くらいの男の人が声をかけてきた。「お・・・お前達起きたか。山の中では暖がある

からと油断したら死ぬぞお前ら」

「え・何があつたんですか?」声を出したのと同時に横腹が痛んだ。「お前らは熊に襲われていた。」「そんな危険なところを助けて貰ってありがとうございます。」「龍也はしつかりとお礼を言った。その後いろいろなことを来て、この人はトサチという名前でこの山で修行をしていた途中だったそうだ。「トサチさん、なんでここで修行してるんですか?」龍也が聞いた。「俺賦族っていう冒険好きの中学生を近場から集めたグループを作ったんだ。彼らは今山の向こう側にいるんだがな、頭はいいんだが、戦闘能力が低いってやつが多いんだよ。だから彼らだけで修行させて、俺は俺で山にこもりながら、氷刀っていう伝説の宝刀を使えるように修行してるんだ。」「その後もまた色々な会話を交わしているうちに、トサチに気に入られて、その中学生に会うことになった。そして歩いたら何日もかかる山を三人まとめて担いで運び、30分で山をこした。」

そしてついたらまず中学生達にトサチから紹介してもらった。その後、彼らの自己紹介を聞いた。双子のベッタ、ベツト。足の早いサトシとナリマ。この二人はあとで三人と競争することにした。学校で強いマカブーにいつも一緒にいる栗田、クロト、ザビツキユ。そして最後にナカチ。男子は全9人なそうだ。女子はヤシナ、ミノ、ラミ、ベック、イトヤ、ヒエの全7人なそうだ。普段学校では普通の中学生の彼らは、放課後にこの場所で修行を始めると別人のようになつて修行をしているそうだ。そして一旦龍也、拓也、霧舞VSサトシ、ナリマの100m走バトルをすることにした。いちについてヨードン!!最初みんながサトシ、ナリマの圧勝だと思っていた。50m辺りまではサトシ、ナリマ、拓也が前でその後ろに龍也と霧舞という感じだったのだが、離す距離が短かった。龍也は50mの辺りから一気に加速し、ぶつちぎりのゴール、その後拓也が、そして霧舞、サトシ、ナリマの順でゴールした。ゴールした時、その場が沈黙に包まれた。最初に喋ったのは拓也だった。「りゅ・・

龍也……はやつ！」なぜか仲間の彼らが驚きあっていた。拓也は足には凄い自信があったのだ。その後、少し会話した後、修行の見学、参加の権利をもらえることになった。

1日目、まずは修行の様子や、やり方を知るために修行を見学することになっていた。そして見て感じて感じたことを今後の修行に活かすために教えてくれるように、と頼まれた。見ているとあつという間に修行の見学が終わった。そして、まずは三人のものをみる目を試験するかのように、修行の様子を紙にまとめてと言われた。龍也はこつちの世界に来てから大丈夫だったが、拓也はこうというのは苦手だった。だが、最後にこれが立派だったほど上級の修行を体験できると言われ、拓也は燃えていた。ここからは三人の筆記後の紙を見てみよう。

龍也、このみんなは役割分担がしっかりされている。ベツタは運動をやっていて知能が多く頭が良いのか、基本司令塔という感じ。それをサポートするのがヤシナ。疲れきったみんなを励ましながらしっかりと仕事を進めていた。この二人はリーダー格だが、戦闘はせず、全員の中でも高い知能を活かして実践では数ある作戦をその場にあわせて指令をだしていそうだ。また修行の種類を見る限り他の女子は遠隔攻撃が主体なようだ。マカブーと栗太は体当たりみたいな物理攻撃が多く、良く考えてありそうだ。サトシ、ナリマは足が速いが持久力に長けてはいなく、今は持久力と体を作っているというところだろう。ザビツキュは間合いをとった攻撃、ベツトは喧嘩風の戦い方のように見える。修行の内容からクロトは水中で長時間泳げるようにしているように見えた。大体こんな感じだろう。

凄く真面目に書いてあった。普通の人が初めて見たものをここまで想像したり、考えたりできるものだろうか。それとは全く違うよ
うなのが拓也だった。

拓也、みんなしつかりやってていいと思うな。

なんて簡潔な文章だ。続いて霧舞。

霧舞、全員がベツタかヤシナの指示で動いているように見えるが、個々が考えてやっていそうだ。リーダーなどはなく仲が良さそうにも見える。だが、細かい会話や行動を見ていると恋愛感情を持ち込んでいる人もいる。この中で一番ダメなのはナカチだ。我が強いし、性格もあまり良くないのか、嫌われているように見える。その点を改善しなければ、ここは強くない。

二人はきちんと書いていたが拓也はできとうだった。しかし、これが拓也の知能面の限界なのかもしれない。そう思うと少し不安になる。修行が終わり、彼らは普段通りの人に戻った。そしてさっきの紙を見たベツタが「明日までに全員の修行メニューを作るときに一緒に考えておく」と言い去っていった。

次の日、三人の修行メニューが発表された。賦族のみんなも今までで一番いいメニューがでるんじゃないかと期待しながら聞いていた。今までで一番いいのが女に混じって射撃などだった。ちなみに悪いのは雑用に耐える執念をつけるという修行。発表された。メニューに書いてあったのは、拓也は50？走ってからザビツキユと間合いをとった攻撃の修行。過去に50？の修行をだされた少年は戻ってきたら修行が終わっていて、翌日も走っただけだったそうだ。霧舞は昨日パチンコの技術を見せたからか、女の遠隔攻撃の技術を高めてあげてほしいとお願いされた。龍也は50？走った後、全員の修行に参加するという過去最高の修行だった。賦族のなかでも全ての修行をやったことがある人はいないそうだ。修行を始めて、約一分全員が本格的に始めた。

CHI・TOな修行参戦

龍也と拓也の走りは並の人の走りではなかった。拓也は賦族のなかでも足が早い二人に5?程度の差をつけて走っていた。だが龍也はそんなレベルじゃなかった。拓也が30?を走り終えたころ龍也はベッタに到着した、と報告をした。さすがに昨日に走りを一度見ているとはいえ、脅威的な早さだった。その後、すぐにザビツキュとの間合いをとった攻撃の修行に入った。龍也の修行は教わりながらなどではなく、もしそういう敵にあった時にどう倒したらいいのか、攻撃されながら考えるというものだった。ザビツキュは基本背負い投げを中心に柔道得意としていた。そこで龍也はもしいきなり背負い投げをされた時、どう対処すればいいのかを目的とした。一回目、背負い投げという名前は聞いたことがあったが初めて見て体験する。いきなり投げられる。龍也は足と手を叩きつけた。衝撃は多少減らすことができたのだが、かかところが凄く痛かった。二回目、一回目の経験をさっそく活かし、手だけを思いっきり叩きつけた。次は強く叩きつけすぎて手のひらがヒリヒリした。三回目は一瞬で手をそつとおき、一気に押し上げた。これが自分の発想でできたので、ザビツキュとの修行は終わらせた。その時、ちょうどベッタに報告をしてから来た拓也と偶然あった。龍也は受け身ができるようになったので、拓也に背負い投げしてみると言った。拓也は普通に躊躇なく投げた。そこで龍也は受け身して立った後、見様見真似で背負い投げをした。筋がいいのか、龍也はそれに近いことをすることができた。拓也はとっさの判断ができず、何もせずに地面に叩きつけられた。その後の修行では、ザビツキュと拓也の真剣バトルが始まった。一方霧舞は女が嫌いだったが頼まれたから仕方なく教え始めた。銃、または弓を一発ずつ見ていくと霧舞は基礎がなっていないことに気づいた。銃は撃った時の衝撃に耐えることができず、命中率が相当低かった。弓は引く力が足りなくて、威力が弱かった。

このことをベツタにいうと今から二人でメニューを相談することになった。まず一番最初に決まったのはどちらも腕力をつけなくてはいけないということだった。そして銃部隊は足腰も鍛えなければいけないということになり、弓部隊は毎日、銃部隊は二日に一回、ヤシナ監修のもと、腕の筋肉をつけるためのトレーニングをすることにした。そして銃部隊は他の日は足腰を鍛えるために50?走…といたいところだが彼女たちは体もそこまで頑丈ではないし、女なので20?走をすることになった。今日の間はまず龍也の修行を始めてしまったので、ひとまず霧舞はそっちの指揮をとることにした。修行内容はまさかの本気で撃った銃丸や弓をかわしたり、とめたりする修行だった。龍也は驚くことなく、普通に撃つ方向の真ん中らへんまで行った。龍也よりパニクった実際に撃つという修行はしていたとは言え、所詮修行は修行。まだ旅にでたこともなければ、動く人に向かって撃つこともない。当然驚くだろう。そんな中、霧舞が始めるぞつと号令をかけた。だが、誰も撃とうとすらしなかった。その時、龍也が油断した隙について霧舞が発砲した。その弾は見事?に的中してしまった。女子の中の一部は泣き出してしまった。だが龍也が「あれ、痛くない。お前らが使ってるの実弾じゃないのか…」霧舞の考えは伝わっていたのか、龍也はいかにも喰らったように服の中だけ鉄にして、防御していた。拓也と霧舞の能力は全員知っていたが、龍也の能力は知らなかったのだ。なので、実弾なのだ、偽物のように演出し、女子達に撃たせ始めることができた。一応、龍也は弓もとめることができるということを見せてからだったが…。それにしても、もし不意打ちで実弾を喰らっていたらどうなるんだろう、そう考えると霧舞、相当な勇氣だ。実際に始まると威力のない弓は簡単にとめられ、命中率の低い銃は近くに飛ばなかった。なので、修行は中断し、体ができたらまたやることにした。そして女子達は終わった後すぐにトレーニングにはいった。その間、龍也は次の修行に入った。相手はマカブーと栗太だった。その二人を同時に相手をして、かわすのではなく受け止めたり、突っ込んで

くる勢いを巧みに使って攻撃するという修行だった。この二人は凄くしぶとそうだった。そして、修行が始まった。始まった瞬間、栗太が横から全力で走ってきた。少し太っているのだが、普通の人よりは早いくらいの足の早さだった。だが、龍也はそのくらいは簡単にかわした。だが、敵は一人ではなかった。マカブーに気づいていないうちに背後をとられ、上手に転ばさせられた。そして、それを二人の体重で完全におさえたら、もう抜け出す方法はなかった。なのでもう一度最初からやり直すことにした。二回目、次はマカブーがいきなり突っ込んできた。背後をとられないように気をつけようと思いつながら、かわすとマカブーと横一直線程度になった時、方向を変えてさらに突進してきた。横からあつたので、前にでてかわせたのだが、そのかわしたところを栗太が突進してきた。実際はもっと強いらしいが、まだ慣れていないので軽くやっていたお陰で、2m程度しか飛ばなくてすんだらしい。軽くて2mなんてどんな力だよって突っ込みたくなるくらい力だった。少しの間、軽くやっていたのに痛く痛くて痛すぎて、少しの間うずくまっていた。その後、三回目の挑戦が始まった。次は前から栗太、横からマカブーが同時に走ってきた。簡単にかわせたと思った時、マカブーと栗太が合わさった中心で両手をつなぎ、グルグル回って、一人を龍也の方にとばした。そのスピードで左右前後によけることができなく、上に飛ばばかわせるんじゃないか、と判断した龍也は近くにきた時に限界までジャンプした。しかし、最高地点だったにも関わらず、栗太は簡単に勢いのついたまま上にジャンプし、龍也の頭を肩が越した辺りの時に下に落とそうと下に向かって押した。こんぐらいの衝撃なら大丈夫そうだと普通の人は思うだろうが、この二人の連携は凄く上手だった。下に向かって押した時に、地面の辺りでマカブーからのタックルを喰らい吹っ飛んでしまった。それが終わった時に修行の時間も終わりになってしまった。その前まで拓也はずっと全力で戦っていたので、凄く息が荒れていた。修行が終わった後、アドバイスをしたり、してもらったりした。龍也はマカブー、栗太

から明日の練習に向けて、二人を常に視界に入れておけるように心がけながら戦えばいいだけというアドバイスをもらったのだが、それができないからどうにもかわすことができないのだ。なんと大雑把なアドバイスだろう。拓也はザビツキユから、攻撃的過ぎて、常に攻撃を喰らう範囲にいるので、実際に戦う時は危ないというアドバイスをもらった。逆に龍也はザビツキユに拓也との戦いをみてみると、背負い投げをする時に、いかにもしそうな雰囲気をかもしだしているという助言を加えた。そして、終わった後にベッタとヤシナと霧舞と他の女子全員で明日の修行内容のミーティングを始めた。そこで明日からランニングや筋トレをすることを伝えて、ミーティングは終了した。

CHI・TOな修行終了

修行を一緒にやるのも今日で終わり。拓也は少しでも早く、次の場所に進めないかと考えていた。もっともその原因は『ザビツキユに勝てない事』だった。拓也には攻めの心しかなく、守るとい言葉は知らないのか、というくらい攻める。まるで猪なのかというように攻撃も分かりやすい。その分当てられたら、凄く聞くのだが、間合いのとれるザビツキユには分かりやすい攻撃にあたる事もなかった。修行が始まり、拓也对ザビツキユの戦いが始まった。拓也の重心が前になったのを見破り、ザビツキユは、横に移動しようとした。すると、予想通り拓也が突っ込んできたのだが、気づいていただけあって、当然のようにかわせた。次はザビツキユが攻撃するよ。うだ。全力で前に突っ込んだせいでバランスが悪くなってる、拓也を後から思いつき飛び蹴りした。もともと柔道の技が得意なのが、少しは他のこともできる。だがこれは拓也が早瀬に何度も何度も飛ばされていたうちに防ぐことができるようになっていたので、背中を蹴られた痛みだけで、顔面から地面に打つなどということはなかった。ここからは本当にマジモードに二人ともなっていた。拓也は止まる事のない怒涛の攻撃。しかし、ザビツキユはそれをかわしながら、隙をついて攻撃をしていた。二人の対決は見ていると圧倒的に拓也の方が不利だった。だが、2時間程度この状況が続いた頃、ザビツキユのスピードが落ちてきた。日ごろの戦いではここまですで長引くこともなかったうえ、ここまで続くことを想定した修行もあまりしていなかった。だが、拓也は2時間動き続けることは普通にあつたので、疲れてはいたが、攻撃の手をとめなかった。だが、ザビツキユも拓也の様子を見て、「拓也なんかに負けてられない！」と思ひ、すぐに元の早さに戻るところか、元々よりも早くなつた。火事場の馬鹿力だ。そのせいで二人の戦いに決着は付かない。いつになっても終わらなさそうなので、この二人は一旦置いておこ

う。

修行を開始した。龍也は、マカブーと栗太との熱戦を繰り広げていた。二人には昨日負けっぱなしだった龍也は「今日こそは勝つてやる」と、二人に堂々と宣言した。しかし、二人はまるでバカにでもしているかのように、「お前が俺らに勝てるんでも？」と笑いながら言っていた。火花を散らしても何の意味もないので、早速戦い始めた。先手をとったのは、龍也。だが、龍也はかわす修行なので攻撃はしない。栗太が突進してきたところを、マカブーの背後に隠れ、とにかく突っ込むだけの栗太はマカブーにぶつかりそうになったところを殴られて、止まった。しかし、龍也も余裕はなかった。すぐにマカブーが腕を後ろに回し、龍也をおさえた。そして工夫して自分は龍也の背中を見ているという位置に移動して、背中に膝をあてて、一気に地面へと倒した。そして、龍也が起き上がろうとするとマカブーが上から隕石のように落下してきた。だが、龍也はこのパターンは一度やられていて、すでに読んでいた。なので、素早く避けることができた。しかし、場所が悪かった。移動したところにならぬと栗太が突っ込んできた。地面に思いつき叩きつけられる。もしかするとそこまで綿密に作戦が練られていたのかも知れない。そう考えると、このチームのブレインが恐ろしく感じる。吹っ飛ばされたが、これはもう何度も体験していた。すぐにおきあがり戦闘態勢をとった。栗太は最初にマカブーに飛ばされた後、全力で走ったせいから足を痛そうにしている。それに比べてマカブーは全くの傷もなく、まだまだ戦ってやろうじゃないか、という顔をしながらかかってくるのを待っていた。そして再び戦い始めて10分、栗太の動きが鈍くなってきて、ついには龍也はかわすことに成功した。

次に龍也は他の人との修行を開始しようとした。「い・・・いてえええええええ。」何があったのかは分からないが龍也がいきなり叫んだ。次に誰と修行をしようかと一緒に相談していた、ベツタは

すぐに近寄った。龍也は足を抱えて、地面に倒れていた。龍也は足をつつていたようだ。今日はこれ以上修行をすると良くないということ、龍也、拓也、霧舞の修行への参加は終了した。そして、三人は明日になったら、また旅にしようと今日の残りはゆっくりとすることにした。

翌日、三人は賦族のみんなに送られて、再び旅に出発しようとしていた。

CHI・TOな過信からの災い

そして旅に出た。俺らはもうこの辺りには敵はいないと過信して一番強いとまで言われている怨双軍団が遠く離れた場所にいると聞いて、その場所に行こうとしていた。海を渡る必要があったので、今度はちゃんとした船で目的地まで向かうことにした。

～船上～

「う・・やべえ酔ってきた。」「みんな同じだ。口にだすな。」拓也と霧舞が喧嘩をしそうだ。船酔いをしているのは龍也も同様だった。特に龍也はもともと乗り物に弱く、バスに20分も乗ってられないんじゃないか、というくらい弱かったので、龍也はもう喋る事もつらい様子で喧嘩しそうなをとめることもできなかった。三人が酔っている周りでは、他の乗客達も同様に酔っていた。だが、これは今回は仕方ないことのようにだ。空は雲で黒く、雨が降ってきて海も荒れていた。普通ならば引き帰したりするところだが、この船は今、海を中心、周りには陸は見えないような状態だった。そのため引き帰すことは出来ず、そのまま進んでいた。するとその時、海面に大きな穴が出来た。船長は舵をきって落ちないようにしたのだが、潮の流れには勝てず、そのまま落下してしまった。

～海中～

「なんだここは・・？」最初に目覚めたのは龍也だった。海の中で目覚める、その行為自体が変な気もするのだが、三人はそんなこととは気にしていられる状況ではなかった。かなづちの拓也は水の中で溺れている気分で凄く焦っていた。他の二人は周りの様子を見て、それまた焦っていた。周りの状況とは、海の水は何かのオーラで遮られているように中には流れてこないで、周りを流れているだけになっていった。だが、さっき落下した時に、すぐに修復され、水は入

らなかつたが、人達と同時に巨大なウツボのようなのや、キリンと象と鯨を混ぜたような不思議な魚などがオーラの中に入ってしまい、周りにたくさんいるという状況だった。見たこともない魚達に驚いていると、魚に驚いている様子が伝わったかのように10匹くらいが同時に攻撃をしてきた。一匹が最初に龍也の腕に噛みついた。「いてっ。」龍也は腕を鉄にしていたのだが、それでも痛いようだ。鉄には牙の痕跡がくつきりと残っていた。早めに戻した方がいいと思ひ、鉄を解除すると腕からは、凄じ量の血が流れていた。「鉄にしてもこれだけの傷になるなら、腕が食われたらみんな終わりだぞっ!!」龍也が突然叫んだ。それに反応して拓也が後ろに下がった。龍也はかかってこいという表情でいて、霧舞は普段動物を操っているようにやってみせた。だが、この魚達にはそれは効きそうもなかった。それを見て、三人は少し驚いた様子になっていて、これ以上戦っても何もなくなると思われるだけだ、と思ひ後ろに下がってしまった。その時、10匹が同時に襲い掛かってきた。もうダメだ…。三人はそう思った。「ビィビィビィビィ」三人は苦しくないような音を聞いた。ついには幻聴まで聞こえたかと思っていると、鉄になった龍也の足に噛みついてた一匹の魚や他の二人に襲い掛かる寸前だった他の魚は、オーラの外へと弾き出されていた。三人は状況の理解ができなかった。というよりこんなことが起こって一回で理解できる人はそうそういないだろう。三人が不思議に思っていると、いつの間にか龍也が気を失っていた。二人はそれに気づくこともなくポカーンとしていると後ろからダンディなおじさんというような人が黒くドクロマークのついた笛をもって歩いてきた。「あなた達その僕が気絶してますよっ。我が家で看病でもしますかっ。」おじさんというよりは若者というような喋り方だった。二人はその声と喋り方、龍也が気絶していることに凄く驚いた後、そのおじさん・・・?にお願いして家で看病してもらうことにした。「これは傷がひどいねっ。あの魚は牙が凄じからねっ。でも噛まれてたにしては浅い傷かなっ。」なんだこの人・・・。

語尾には「っ」「」という文字が入っているような話し方だし・・・。
そう思っていると龍也の目が覚めた。

CHI・TOな隆

目覚めた龍也はいかにもくだらなめのアニメでありそうな言葉の一部を発した。「ここはどこ?? あなたは誰??」ここは当然、看病をしていてくれたおじさんの家であなただけというのはおじさんのことだ。一見変なことを言っているのだが、実際に知らない人や場所のことを言っているから龍也の脳には問題はないと思える。「ここは俺の家だよ。俺の名前は隆だっ。」「お前、隆っていうのか!」拓也の声は耳に届いていないのか、それとも無視をしているのか分からないが、隆は拓也に返事をする気はなかった。「隆さん、あなたは何でここに住んでるんですか?」霧舞が聞いた。「俺は昔、一族でここに住んでいたんだが、ここから出るときに俺だけ置いていかれちゃったんだ。」返事をする気がないのは拓也が相手な場合だけで霧舞と龍也には返事をするようだ。「ところであの笛は何ですか?」龍也は気を失いそうになりながらも、笛の音を聞いていたようだ。「ああ・それは俺は置いていかれた時に俺たちの場所に古くから伝わる笛も忘れられててな、それを聞けば人は力を失い、動物達はすぐに逃げていくということがある笛でなこれがあつたから生きて来れたんだよ。」「その笛のお陰で俺の命も助けられて、凄い笛ですね。」二人が会話していると霧舞が「ところであの変な魚達は何なんですか?」と入ってきた。「あの魚は古代に陸の動物が海に入ってきてしまつて、一部は死んだんだが、他は進化を遂げてあんな変な魚になつたらしいんだよ。言い伝えだがなっ。」「そうか、だから陸の動物の匂いがしたのに、俺の能力が効かなかったのか。」霧舞は普段陸の匂いが強くついた動物には能力が効くことから匂いで識別し、能力を使っているらしい。「あんたは陸の動物に詳しいんだなっ。俺は海の生き物なら大体は知ってるよっ。」「おお。できれば詳しく教えてくれないか?」「いいとも。」最後だけは「っ」は付かなかつた。ここでまたまた龍也は

話を変えた。「隆さん、提案なんだが、一人で暮らしているなら俺達と一緒に旅に来ないか??」「ここから出れるならいーよっ。」「ここは海深く。通常の間人が真上に上がれば酸欠で死ぬ。それどころか、ここは危険な魚の多い海だった。オーラの外に出れば、魚の牙の餌食になるだろう。」「そうか。じゃあこんなのはどうだ。俺があの家を鉄にする。窓の部分にはオーラをくつつけて、全員が中に入る。その後、周りのオーラを破壊して、そのまま水面まで上昇する。」「成功するかは知らんがやってみよっ。」「

実際に開始して、すぐに家の方の準備はできた。そして全員が家に入り、出発!!とは行かずにオーラを壊す方法を考えることにした。結果的には霧舞がパチンコの弾の爆発であけることになった。霧舞だけが家の外にでて、家の中に入る準備は万端の状態です。オーラを破壊した。すぐに水は流れてきた。霧舞が家に入りきると、水が来るのにはほとんど差がなかった。そして周りは水だけになり、浮力で浮くぞ!!という話にはならず、鉄の重みと四人の体重では浮きそうもなかった。そのまま時間が経ち、龍也の気が抜けて、家は元の状態に戻った。しかし、それでも浮く様子はなく、四人は時間の経過とともに睡眠にはいつてしまった。

朝起きると、俺達は知らない浜辺にいた。またまた『ここはどこ?』と言うのか、と思うと霧舞と龍也と拓也は目覚めるとすぐに、ここは怨双軍団のいる島だ、ということが分かった。それはすぐそばに怨双島と書かれた看板があったからでもあるのだが。拓也は「目的地についたぜえ!!このまますぐに向かおうぜ!!」と言った。だが、「俺達が今怨双軍団のどこに向かっても、ただただ負けるだけだ!!」「今すぐに死にたいのか?」と霧舞、龍也から反対された。しかし、拓也は諦めなかった。「なんでだよ!!じゃあ俺達はなんのために船に乗ったんだ!!」「元々は戦う気だった。正直俺だって弾がどの程度効くかみたかったよ!!でも俺達は

魚にも勝てないんだよ!!」「まあまあ喧嘩じゃなくてゆっくり話し合いしなよつ。」「うるせえ!!お前は関係ねえ!!」「そんなこと言うなら実力で黙らせるよつ。」「上等だ!」拓也はすぐに戦闘態勢にはいった。しかし、拓也の攻撃より早く隆は笛を吹き始めた。拓也、そして巻き込まれた龍也と霧舞は笛の音を聞き、立っているのも辛い程、力がなくなった。拓也はこれ以上無駄だと思い、「分かった!!話し合いで解決する!!」と言った。そのお陰で龍也と霧舞も楽になった。そして話し合いをしようとした時に、隆はいきなり具合悪そうにし始めた。どうしたんだ、隆。

CHI・TOな木の実

約10分後、隆の状態は回復してきていた。「どうしたんだ？ 隆さん。」龍也が心配して声をかけた。「俺はな・・・。長年この笛を吹き続けて、いつの間にか自分の吹いた音を聞いただけでもたまに具合悪くなるんだ・・・。」「そうなのか。」「なんで海の中では大丈夫だったんだ？」「霧舞が気になった様子で話しかけてきた。「もう十分病状は酷いんだが、まだ完全ではなくて、毎回は具合悪くならないんだ・・・。だが、いつ毎回具合悪くなるようになるかは分からないが・・・。」「こんな話をしているうちに喧嘩もおさまっていた。そして、その後相談をして、今はまだ怨双軍団のところに行くのは早いということになり、苦勞して辿り着いたこの島を何もせずに他の島に行くことにした。他の島へは道がつながっていない、凄く簡単に移動できるようにできていた。そのため、すぐにその島に移動することになった。島と島との間は約4kmあるのだが、海と海の間には細い道がある程度で横に二人も並んで歩けないぐらいだった。さらには海の状態も悪く渡るには悪い条件だったが、四人は全く気かけずに、その道に向かって歩いていった。

道にたどりつき、四人は渡り始めた。渡り始めて、すぐに風に煽られていることが分かった。あまりの強風で油断すれば海にまた落ちてしまうくらいだった。しかし、半分くらい渡り終わった時に、風だけではなく波までが襲い掛かるようになってきた。そのせいで四人は、また海におちてしまった。だが、今回はある意味、運が良かった。落ちてから気を失うまでの間に海の上に浮いていた巨人に四人は助けられたのだ。その巨人に隣の島まで連れてもらうことになり、その島に辿り着いた。後から聞いた話だと、二つの島は昔は渡れるようになっていたが、今はその道では渡ることはできなくなっているらしい。その原因は海にいた魚達とほぼ同様な動物達のせ

いだった。この島は動物を急激に発達させる木の実があるそうだ。その木の実を食べた動物は急激に発達するらしい。たとえば人が鳥になりたいと思いがら食べる。すると人の腕から羽根が生え、空を飛べるようになるらしい。四人はその巨人にお礼を言い、実を探しにいくことにした。実のあるはずの森に入つて数分、さすがに動物がいるだけあり、まだ全然歩いてないにも関わらず50匹は動物を見かけた。しかし、どの動物も彼らには襲い掛からずに周りを見ていないかのよう生活していた。森の中をだいぶ歩き、奥まで来た時、突然虎が襲い掛かってきた。しかしただの虎ではなく、(象 \div 2+虎) \div 2 \parallel 今ここにいる虎のような生き物という感じだ。虎の血が入っているだけあり、凄く獰猛で今までの動物達とは違つようだ。しかし、四人は何もなかったかのように走りさつていつてしまった。虎の獲物は四人ではなく、その後ろにいた、(象+虎 \div 2) \div 2をしたような、その虎より象の感じが強い動物だった。その二匹は四人が通るよりも早くからずつと戦つていたようだ。そして四人はその動物や他の動物もさらに通り過ぎ、森の中心辺りにきた。するとそこには赤い実がたくさんなつていた。四人はこれが発達する実だと思い、他の動物との合体を目的ではなく、今の自分より強くする材料をこの実に求めていた。四人がこの実を手にとろうとすると、(人 \div 2+鮫) \div 2をしたような動物がその手ははじき、とらせないようにしてきた。この動物はこの実を守る番人なのか・・・？

CHI・TOな試練

その動物は水中のサメを陸にあげ、擬人化させたような形で、鮫肌や荒っぽい性格はそのまま残っていた。そのうえ人が混ざり、陸でも水中でも結構なスピードで移動できるような動物だった。そんな動物が四人の求めている実を守っていた。龍也は不思議な実を食べ鉄を使えるようになった。しかし、噂では怨双軍団は全員がこの実を食べるための試練を完全に成功し、実を食べて全員が理想の自分になれたらしい。欲深い拓也はどうしてもこの実を食べたくて凄く乗り気な様子で、「どんな試練でも乗り切る」と簡単に言ってしまった。この時は全員が実を食べたくて、慎重に、という言葉を忘れ、試練をやることになってしまった。そして、鮫人間から言われた言葉は、「無人島で生活してこい。」だった。それに対して拓也は「マジかよ。やる気失せた。」と言ったのだが、「自分で言ったこともできないなんてお前は弱いなあ。」と返され、無理な言い訳をしていた。そして島まで運ばれる前に渡された材料、それは本当に何もなく、小麦粉だけだった。あとは「命令がある時はそつちに伝えに行く。その時まで小麦粉は使うな。」と言われ、あとはそのまま鮫人間の仲間の鮫達な運ばれ、人は一人もいなく、周りは海だけの島に置いてかれた。

この島については何も知らぬまま、四人は活動を始めなければいけなかった。四人は家のようなものはいらないと判断し、火、水、食料は確保しようということになった。動物を倒す能力に長けている龍也が食料というのは最初に決まったが、霧舞が「俺のパチンコの弾で水と火いけるんだけど」と言ったことで悪いことはないが、三人が何をするか、という話し合いになった。結果的に揉めて揉めて決まったことは、霧舞は海水からの塩づくりをし、隆と拓也は森で役に立ちそうなものを拾ってくるということだった。揉めたのは、

拓也が隆と一緒にヤダという小学生的発言をし、そこで軽い揉め事があった。だが、仕事は決まり、実際にやることにした。海にきた龍也は、初めての素潜りをするところだった。前の世界にいた頃、TVで『無人島0円生活』という番組がやっていて、その時に、素潜りは難しいといっていたが、龍也に素潜りに挑戦する機会ができた。そして、海にダイブ。水しぶきがビシャツと上がり、海面では体が叩きつけられたようなパーンツという音が聞こえてきた。海に飛び込んだ龍也は海面と平行に落下し、ただ叩きつられるだけだった。少しダメージを受けたが、実際に潜りはじめることにした。一回目。海に潜ろうとした。バシャバシャ、水面にある水しぶきはなくならない。よく見ると龍也は体は沈んでいるのだが、足だけが水面に残り、完全に潜れてはいなかった。とりあえず一回顔をだして、その後も何度かやってはみたもの、全くの進歩がなく、より簡単に潜る方法を考えることにした。10分の悩みの結果、龍也は鉄の重さを利用し、潜る…というよりは沈むことにした。自分の体を鉄にして、一気に潜る…じゃなくて沈む。魚のいる深さの岩の上で止まり、魚を捕まえることにした。鉄のまま少し歩いてみると、足元では、バキツなどの音が聞こえ、足の裏に柔らかいものがくつついていた。何か気持ち悪いものがある、そう思ってしまったを見ると、貝や海藻がたくさんあった。それを見て、龍也は拾わないわけにはいかないな、と思い拾い始めた。よく見れば、貝殻は割れ、身がでてるものや身までもつぶされているものもいた。そう、犯人は…龍也だ。しかし、龍也は誰がこんなことしたんだ、と思いつながら、多くの貝などを抱え、陸き戻った。たくさん貝をその辺に置き、次は魚を実際に狩ることにした。海に沈んで、周りを見渡せば、大きな魚がたくさんいた。その魚一匹一匹に特徴があった。そしてその中でも特にあまり強くなさそうな魚をとることにして、魚との戦闘が始まった。

そのころ一人だけ地味な作業をしている霧舞は海水を布で作った

なべを龍也が鉄にしたものにいれた。そして近くからできるだけたくさん木を拾ってくることにした。森の手前の方の木を枝をたくさん折り、少しずつ運んでいると、砂に足をとられ少しずつ体力を削り取られて、結果的には足がもつれて転倒してしまった。地味な作業でも凄く地味に大変なことをやっている霧舞だった。その霧舞は1時間木を運び続け、その時には焚き火が何個も作れる木の量になっていた。そしてここから霧舞の塩作りは開始した。

そして、拓也と隆は薄気味悪い森の中を探索していた。森の中には、実的なものはあまりなく、ただ森の調査に来ているおっさん、そんなようにしか見えなかった。この森は、今までの修行に来た人達の誰も奥深くまで足を踏み入れた事のない、未知の森だろう。しかし、ここには動物達はたくさん生息していた。蛇など湿地に多くすんでいそうな動物や毒をもった動物がたくさんいた。さらには、めったに見えない程のサイズで巨大なものだった。足場の悪い森を何分も、歩き、転び、起き、を繰り返しながら二人は喧嘩をしながら奥へ奥へと進んでいった。そして二人が何かを発見し、足をとめた。前には、一匹のツチノコのような生物。それを見ていると、上からはたくさんの蛇達が降ってきた。敵意まるだして、牙をむき、今にも毒を回してやる、そんな状態だった。二人は余りの量に動くすべもなく、その蛇が直接あたった。ぶつかつた後、ほとんどが地面に落ち、噛まれていないようにも見えた。しかし、それは違った。あまりの猛毒に拓也の手に痺れがまわってきた。その痺れは全身に伝わる。そして、拓也は気絶。しかし、地面にはたくさんの蛇達が……どうなる、二人。

一匹の魚を狙い、狩りを始めた龍也はいきなり、モリと同じように使おうと持ってきた木の枝一本を鉄にし、狙った魚の目をねらって、モリを投げた。しかし、あまり慣れていないのと、鉄の重み、そして水による浮力があり、魚には当たったものの動いてたのもあって、当たった場所は、ヒレだった。ヒレなだけあり、ダメージはゼロ。そしてモリは鉄の重みで海深くに沈んでいった。龍也はその後もう一本モリを作り、次はもつと近寄って刺すことにした。近寄っていくと魚も襲ってきて、龍也は丁度魚の上にいる状態になった。こんな絶好のチャンスは逃すわけにはいかない。龍也はすぐに目を確実にさし、一緒に仕留めてしまおうと首の辺りに鉄にした自分の手を思いつきり刺した。さすがに大きな魚だが、この攻撃には耐えられず、弱った様子になった。血がドクドクでた魚を龍也はすぐに浜にあげることにした。しかし、さすがに大きな魚な分重さも重く、浜にはあがらなかった。なので龍也はその場で小さめに切り、少しずつ運ぶことにした。最後の方、元々はあつたはずの尻尾付近が完全になくなっていった。よく見れば、何かに噛みつかれたような跡が少し分かった。多分鮫だろう。血の臭いに敏感だから、刺したときにでた血によってきて、食べてしまったのだらう。しかし、今からまた何匹も取りに行く必要はなさそうだった。見た目ではマグロが2匹いるくらいの量だから、絶対に1日は持つからだ。そのため龍也は狩りをやめ、砂浜で一人ゆっくりすることにした。

塩作りの準備ができた霧舞は、木に火をつけ、鉄鍋には海水をいれ、熱し、少しずつ水分をとばしていき、最後に塩が残るという作り方だ。実際に成功するかは、全く分からなかった。しかし、十分にやる価値はあつただらう。熱し始めて時間が経ち、だいぶ水分も減ってきた。不幸がこの時突然やってきた。龍也が陸に上がってきた。

て鉄が解除してしまい、布に吸収されてしまった。霧舞の長時間の頑張りも龍也のたつた一つのミスで終わった。布に少しは塩がついてるはず、そう思うかもしれないが、布はすでに灰になっていた。龍也は魚をとつたが、霧舞の収穫はゼロだった。

蛇からの奇襲を見事にうけた拓也は毒がまわり動けなくなった。

蛇はすぐに笛でいなくならせたもの、拓也を連れて、浜まで戻らなければならなかった。しかし、隆は長年生きてきた知恵があったからか、歩いてつれてはいかず、ポケットら不思議なものを取り出し、空に向かって投げた。空には火が見え、すぐに消えたが、遠くから見ても気づくくらいだった。　　試練開始後　　四人がすること
が決まり、それぞれ始めた。龍也はすぐに行つたが、隆はもしものために、霧舞から火の弾をもらつていた。隆はこれを霧舞への合図として使つた。すると霧舞が奥まで行こうとしたが、龍也が何かを感じとつたのか、動き出し次々に奥の方へと、木を斬りながら、進んでいった。急いだけあり、拓也達のところにはすぐに着いた。だが、二人は拓也を運ぶだけの仕事で、すでに隆によって毒抜きがされていた。龍也と霧舞は拓也を背負いながら、隆と共に斬つてきた道を辿りつつ、最初の場所に戻つた。　　ハプニングがあつたものもあるかもしれないが、収穫は全員で魚だけ。調味料に値するものがないため、魚の味を味わうことになる。拓也と隆は焼き魚、霧舞と龍也は刺身を推していた。「刺身は醤油をつけて楽しむものだよ。」「それは違う。刺身ほど魚の味の分かるものはない。」「何言つてんだ！魚は焼くもんだろ。」「何だ！そんな考えが間違っている！龍也はどう思う！」「こんだけあるから両方作る。」「一分近く沈黙）拓也と隆は火をつけるために枝を準備し始め、霧舞は一本の枝を鉄にし、包丁のように使い、魚を捌いていった。刺身は準備が出来、その後に、焼き魚も出来て晩飯に入った。明日は今日の魚が残っているので、龍也は海には行かないで何かをすることにした。美味しく晩飯も食べ、今日は眠つた。

龍世の探った貝達は記憶から消されているようで、
會々々に終わ
った。

CHI・TOな意味不修行

翌日、塩作りと森の探索は昨日と同様にすることにし、龍也は枝集めや、木から利用できるものを作るということをすることにした。

龍也は全身を鉄にし、次々と木を根元から斬って、砂浜に飛ばしていた。地球温暖化の原因の一つの森林伐採の中に入るだろう。(え 10本も斬った後、龍也はその木の枝を全部切り落とす。そして、太い部分だけ残し、その部分で道具を作り始めた。斬ったときに残った切り株をもういちど取り、それは椅子として使うことにした太い部分の一つを片面を平らにし、ものを置けるようにした。そして他の木では、食べ物を置いておく台などを作って、あとは枝の加工をするものはするだけだ。昨日、包丁として使ったひ刺して切るに近かったので、削って包丁として使いやすい形にすることにした。加工は意外と難しく苦労しながら少しずつそれっぽい形になってきたので置き場に置いて残りの枝は、焚き火のように横に並べておき、龍也の仕事は早々と終了した。

昨日に続き地味な仕事の霧舞は、「今日は絶対に鉄を解除するなよ。」と言ってから、また作業にかかった。手順を昨日と同様にやっついていき、今回は塩っぽくなるころまでいった。しかし、少し目を離れた間に焦げてしまい、苦しよっぱい塩になってしまった。しかし、前回とは違くまだ使えるような状態なのはせめてもの救いだろう。

今日は昨日の蛇に襲われてしまうという失態のあった拓也は今日こそ色々なものを集めると、決意していた。前回蛇に襲われた場所くらいまで奥に進み、二人は周りに何かないか、と探していた。しかし、奥に進めば進む程あるものは苔の生えた石、ただそれだけだ

った。残念ながら何もなく戻っていくと森に入って1、2分くらいの時に通った辺りに、栗がたくさん落ちていた。二人はせめてもの収穫としてそれを持ち帰ることにした。

今日もそれぞれ作業を進めることができた。しかし、霧舞、拓也が不満を持っていたようだ。「おい！霧舞。その黒いのはなんだ！？」「塩だが文句あるか？それよりお前の収穫こそどうなんだよ。」「焦がしたのか、お前アホだな。栗だ！わかんねえのか？」「そんなことは言っていない。お前が栗をすぐそこで拾うのを見ただよー！」「そこも森だろ！？文句はないはずだ。」「そこも森なら、お前は明日はそこもあわせた森全体を探せよ？」「お前の収穫も少ないくせに文句ばっかいうな！！」と、その時海の方から鮫人間がやってきた。そして一言、「その小麦粉に水を混ぜて、十分に練り、その後になねって米の形にしる。そして今日の晩飯はそれを食べる。」「・・・。要するに今日の晩飯までにそれをちねる。そして晩飯は終わるまで食べれないということだろう。」「それが何の意味なんだよ！！」「あまりに意味のない修行に拓也はキレた。さっきのイライラを引きずっているのかもしれない。」「努力、執念、精神力。」「そういつて鮫人間は海の方へ消えていった。」「どんすんだよ！？やるのか！？」拓也はイライラし始めると相手は誰でもいいようだ。「あの実のためならやる。」「と龍也、「実があるんだからやるだろ！？考えてみるバカが。」「と霧舞、「少なくとも俺はやるよつ。」「と隆が答え、とにかくちねるといふ作業に入ることにした。

CHI・TOな実況!?

さあちねり大会が始まりました。かかる時間はおよそ3時間と推定されています。右コーナー魚は刺身だ！龍也と霧舞。左コーナー魚は焼くぞ！拓也と隆。さあここでルールの説明をしましょう。最初にもらった小麦粉を半分に分け、そしてそれぞれ好きな量海水を混ぜ、ちねります。判定基準は：スピード、味、形の三点です。最近この分かれ方での絡みが増えています。さあ解説のチネリスト有野さん。見所をどうぞ。

やっぱりどこまで耐えて続けるかですね。濱口君ならすぐダメになりますからね。

では試合開始！ゴオン。試合開始のゴングが鳴りました。おおつと二チームとも始めない！？龍也チームは：相談などをしているようですかね…。一方拓也チーム動き出しました！小麦粉に水を大雑把に混ぜていきます。さあ台に持っていった。ここで龍也チームも動き出しました！少しずつこねながら水をたしていきます。そして：台に持って行きました。有田さん、どちらがいいと思いますか？少しずつの方が初心者にはあいますね。しかし、スピードを上げたりしたい場合や熟練の技になってくると、まとめていれたりもしますね。

そうですか。ここで拓也チームはちねりはじめましたね。隆選手に比べ、拓也選手は少し遅いですね。龍也チームもちねりはじめました！おっと、拓也チームの二人に比べて、二人とも上手ですね。形・早さ共に素晴らしいです。

そうですね。特に龍也選手はなぜか手慣れているように見えますね。どうしてでしょう。たった今連絡がはりました。龍也選手は作業の上達がはいようです。さあ両チーム頑張っています。あ！アクシデントが起こったようです。先を進んでいた龍也チームの霧舞選手が睡魔に襲われているようです。さらに、霧舞選手の手

ができたものを潰してしまっただけです。形が悪くなりました。さあどうするのでしょうか。形という項目は捨てるのか？おっとここで睡魔に襲われていた霧舞選手が叩き起こされましたね。形を戻すことになつようです。変形したのは半分。それならば、なおしていても大丈夫という考えでしょうか。

みたいですね。しかし、これは予想以上に厳しいですよ。簡単にはできないでしょう。そのやり直しが後からの程度重くのしかかるのでしょうか。楽しみです。

30分がたった。そして、少しの間両チームとも休憩をとっているようだ。しかし、大きな休憩ではなく、海水で顔を洗ったりして三分後にはそれぞれまたちねりはじめた。

さあ、再び始まりました。ちねりっ！ちねって、ちねってまたちねる。その繰り返しです。さあただいまリードしているのは、拓也チームでしょうか？そうみたいです。龍也チームはさきほどの段階で一度とめて、形の修正にはいつているようです。拓也チームと龍也チームの完成個数にはほとんど差はないと言えるでしょう。ここからはどのようにいきたいと思いますか？

え、拓也チームの二人がコツをつかんでくるのが先か、龍也チームが形を戻すのが先かで勝敗が決まりそうですね。拓也チームの二人はコツをつかまなければ勝率は低いとも言えるかもしれせん。

そうなんですか。拓也チームの二人は一刻も早くコツをつかまなければいけませんね。さあ戦いも中盤に差し掛かりました。両チームとも完全に完成したものが半分をこしていますね。経過時間は1時間です。両チームともまだまだ耐えながら頑張っています。

この辺りが一番つらいでしょうね。開始から時間がたつていても、まだまだ終了は見えない。こんなに大変な作業はないでしょうね。まあ耐えれなくなったらもうその時は負けを認めるしかない時

でしょうね。

意外と厳しいことを言いますね……。とにかく選手の四人は耐えて、耐えて、耐え抜いてもらいたいところですね。

（約一時間半後）

さあ大会もほとんど終わりです。あつとここで拓也チームがちねりを終了しました！！そしてそれに続くように龍也チームも終了しました。

拓也チーム スピード 龍也チーム スピード×

そして続いて、形の審査に入ります。龍也チーム……。ほとんどの形が美しいですね。大小に差がなく、平均的な形をしています。そして拓也チーム……。これは大変です！！一個一個のサイズが少し大きい。スピードは大きいからこそ生まれたのでしょうか！？そして結果は……。龍也チーム！！拓也チームはほとんどが同じ形をしていたにはしていたのですが、大きい。それが負けの結果になりました。

拓也チーム スピード 形× 龍也チーム スピード× 形

そして最終チエック味です。龍也チームと拓也チームには平等な条件を与えそこから料理を作ってもらいます。そしてその条件は・龍也の集めた木・魚、そして能力の鉄で作ったフライパン。霧舞の火弾です。さあ両チーム料理に入りました。ただいま時刻は深夜の1時を回っています。さあ龍也チームは早速ちねり米を焼き始めました。チャーハンでも作るのでしょうか？さあちねり米がパリパリになってきました。そして魚を入れて、数分炒めて完成しました。チャーハンです。

一方の拓也チーム、同様にチャーハンを作るようですね。しかし、龍也チームとは逆に魚・米の順でいれました。そしてチャーハンの完成。

さあ食事の時間です。一体どちらが美味しいのでしょうか。一口

目を口に運ぶ。「うまい!!」「ま・まず。」拓也、霧舞が言葉にだした。うまいといったのは霧舞、まずいといったのは拓也だった。そして結果は2：1で龍也チームど勝利。さあ拓也チームはどこがダメだったのでしょうか。米に通す火が足りなくて粉っぽさが残ったようですね。

そして四人はこのように実況されたりするわけでもないちねりを終え、夜遅くに眠った。

CHI・TOな音達

約一ヶ月の無人島生活を終え、今日もまた無人島での一日を向かえようとしていた。しかし、今日はいつもにはない出来事が朝から起こった。四人のもとに鯨人間達が迎えに来たのだ。そして、「終わり。」と一言言われ、四人は実のある島に送ってもらっているつもりでいた。到着した。それは実のある島……。ではなく怨双島との区切り目。実は当然ない。「修行失敗。」ただ一言そう言つて、鯨人間達は去つていった。四人は仕方なく怨双島に戻つていった。

「なんだよアイツ!!」拓也が叫んだ。それを龍也が「俺達は何かを達成できなかったんだろう。」と拓也の怒りを沈ませるように言った。しかし、霧舞が「言われたことはやった。でもそれじゃ足りなかったんだろう。」と言つたせいで拓也の怒りは再び、暴走し始めた。「アイツの説明不足なんじゃねえのか!?言われたことをやってダメ。じゃあ何をやればいいんだよおおおお!!」「俺達が完璧じゃないからだろう。俺達は言われたことを120%にも200%にもして実行できたか??完璧なやつつていうのはそういうやつなんだよつ。」拓也は反論できなかった。実際に言われたことしかやっていない。いや・その前にそもそも修行ができていないかもしれない。普通に生きていくために生活しているだけだった。修行生活ならば四人は修行ができています。だが実際に修行生活ではない。だから失敗でも仕方なかった。だが、実際どうすれば成功なのかは分からない。全く分からないわけではないが、所詮予想の域だった。それじゃあどれだけ考えても解決はできない。四人は争いのためではなく、どうしたら良かったのか聞くために怨双軍団に会いに行く事にした。

街の方につき、早速探すことにした。だが、全然見つからずとりあえず近くの飲食店に入ることにした。中に入れば真昼間から豪遊をしている人達。店の店員に聞くとこの8割が酔っ払いの集団が怨双軍団ならしい。龍也は早速全員に特に慕われている一人の男に声をかけた。「あの〳あの島の修行ってどうやったら成功になりましたか?」「誰だ、お前は。見たこともない顔だな。」「男はすぐに返事をした。質問に対する返事かどうかは別の話だ。」「俺は龍也だ。この前まである実のために修行をしていた。」「そーか、そーか。いまだき無人島に行くやつがまたいたのかあ。俺はマキノ・キングだ。みんなキンって呼んでる。島の成功か。。。おいみんな!!!いつもの場所に行くぞ!!!龍也らもついてこい。」「全員が返事をし、走り出した。スピードはそこそ早い。拓也並だろう。しかし一人の男が、「キン、速度を上げるぜっ」と言った時から全員が速度が一気にあがった。拓也、隆、霧舞はついていくのも辛いペースだった。怨双軍団のなかでも一番前を走っていたのはキンだった。他の人達はキンを抜けなさそうな人ばかりだ。しかし、キンに並ぶ男がいた。それは龍也だった。龍也は凄い足が早かった。しかしその後、キンの後ろを走っていた男が「先行くぞっ」と言い、一気にスピードが一人だけ上がった。それに張り合うように負けず嫌いという能力??を發揮したキンも一気にスピードを上げた。そしてもう一人負けず嫌いの男、龍也もペースを上げ、後続を離しながら三人は走っていた。結局目的地についたのは先行くぞっといった男、キン、龍也の順だった。三人は他の人達が来るまで話していた。

「おい、お前。なんでそんなに早いな。」「キンが龍也にいった。」「何が早んだよ。あんたら二人の方が早すぎるだろ。特にソイツ。」「ああ言っただけな。コイツはギンだ。」「そのあたりで他の人達も到着し、会話は一度中断した。だが、すぐにまた始まった。」「お前らは全員なんでそんなに早いな?」「俺達も答えるからお前が先に言え、龍也。お前の早さはなんでだ?」「自分の脚力。」「全員が驚いた。」「お前達はなぜだ。」「全員が口をそろえていった。

だ！！』

「俺達は音を操れる軍団、怨双軍団なん

CHI・TOな怨双軍団

「音を操る!？」龍也達四人は驚いた。怨双軍団が強いということだけしか情報をもっていなかった四人は音を操る軍団ということは知らなかったのだ。「なんで音を操れると早いんだ?」「拓也が聞いた。それに怨双軍団の一人が答える。「リズムにのって、走ると何か気が楽になるようになってたんだよな……。だから足がそこまです早いんじゃない。俺らはずっと全力疾走ができるようになったんだ。音のお陰でな。」「リズムにのると全力疾走ができるようになる体質……。なんていいことだろう。もしこれがあれば、42.195kmのフルマラソンも余裕で完走できるじゃないか。そして龍也は多くのことを知りたいようで、さらに質問した。「音を使うことで他にも何かできることがあるのか?」「キンが答えた。「それは個々の音を操れるレベルにもよるが、俺は遠くにある大きな物を動かしたりするくらいなら簡単にできるぞ。」「と言いつつ、少し離れていた、キンの家に触れることなく、おした。龍也達から見れば、それは種も仕掛けもないとできないようなマジックに見える。キンがさらに続ける。「まあ要するに自分の体から発生させることのできる音の大きさが大きければ大きい程たくさんの方ができるな。まあ音の種類にもよるが。」「か……。体から音を発生させられるのか!？」霧舞が驚いた顔で言った。それにギンが答えた。「俺とキンは全身から発生させられるぜ。まあ口から出る音が普通の人の100倍くらいっていうだけのやつもいるが、ソイツは口以外から音はだせない。」「そしてキンが、「一回全員の紹介をしないか?？」と言ったのでこっちからまず紹介した。

龍也は鉄を操る少年、拓也は武道、霧舞は動物を操り、万能なパチンコを使う、隆は悪魔の笛を使う、という紹介の内容だった。

キン達はキン、ギン、カク、シヨウ、ドウ、センと呼ばれる人達がいっつもいて、そのメンバーが怨双軍団の主体なそうだ。他にもい

るのだが、怨双軍団の援助として、第二部隊、第三部隊……と
続いているそうだ。しかし、第二部隊以下は音は操れないため、普
段は全くの別行動なそうだ。

そしてもつとも聞きたかった、どのように修行をクリアしたかを
聞くことにした。その答えは、「俺達はこんな島にこもってもやる
ことは何もない、そう思って船を作り夢食島むくに戻った。」「夢食島と
いうのは多分あの実がある島のことだろう。」「え!!そんなことで
。。」「龍也が大きなシヨックを受けた。そして他にもたくさんの方
とを聞いて、彼ら怨双軍団とはここで分かれた。」

CHI・TOな怨双軍団（後書き）

今回は短い回なのでごめんなさい。次回から新しい話になります。

CHI・TOなもう一度!?

龍也達四人は再び夢食島に向かおうとしていた。どうすればクリアなのか分かり、もう一度受けさせてはもらえないかという発想だったのだ。クリア方法をしっていてから、ゲームを始めるような、まるで攻略本を見ながらやっているゲームのような状態だった。しかし、彼らにはそんなことは関係がなかった。少しでも早く、少しでも強くなりたい、ただその一心のまま前回は修行をしていた。今でも酔う前その気持ちはなくなるわけはなく、どんな手段を使っても、成し遂げようと考えていたのだ。

そして、四人が再び、鯨人間のところに辿り着いた。「またお前からか、何をしている。」鯨人間の方から話しかけてきた。拓也は言った。「修行をもう一度受けさせてくれ!」「ダメだ。」「何でだよ!」「この修行は普通はチャンスは一度までとしている。しかし、特例として失敗した日にもう一度受けに来た場合だけ再びチャンスを与えることにしている。」実際四人が失敗を知ったのは、昨日の出来事だった。「あれからまだ24時間たつてないじゃねえかよ!」「日にちが変わったらその時点でダメだ。」「隆は薄々いから続いてもコイツが相手ならばけりはずかなくはないと思っていた。だが、諦めるということは誰もしたくなかった。」「そんなのそっこの勝手じゃねえかよ!」「鯨人間が立ち上がった。そして、四人を思いつき叩く。「お前ら、そんなに欲しいなら命をかけた酷い修行にも耐えられるのか??それならば天海に行つてもらおう。」「いいだろ!!言つてやるよ。その代わり達成したら、その実は渡せよ!?」「分かった。それならば天海に送ろう。」「四人の周りに何か壁ができた。「なんだこれは。」「大気の壁だ。10秒後一気に発射するぞ。」

10秒が経過した。その壁が割れて、四人は何かの力で一気に飛ぶ。……記憶があるのはここまでだった。龍也達は雲のような見た目で、コンクリートのような硬さの上にあった。途中気絶していたかもしれない。起き上がって歩いていると、少し離れた場所に看板が見えた。そこまで歩いていってみると、その看板には、『Sky Seaへようこそ』と書かれていた。しかし、そんなところにゆつくりとまっている暇はなかった。我々の世界で言う警察のような人達が、「不法侵入の疑いで逮捕する！！」と叫びながら追いかけてきたので、四人は何も考えずに必死で逃げてしまった。その間、拓也は心の中で『あの鮫人間！！不法侵入になるようなことすんなよ！！』と思いつながら、必死に逃げていた。とにかく走る、どれだけ走ってもまだ後ろには警察がいる。明らかに助かる位置にいるのは、龍也だった。全く追いつかれそうにない。逃げ足……・……追う時も早いから、足が早く逃げて足も早いようだ。（もが大切ですね）

そして走り始めてから時間が経ちようやく振り切れた。と思ったのだが、また追いかけてきて四人は逃げ始めた。するとその時、雲のような見た目は変わらないものの急に足場が水のようになり、四人は次は泳ぎ始めた。雲海と名付けよう。雲海のなかを四人が泳ぎ始めると、警察はついてこなくなった。だが、その代わりに巨大タコが出現した。龍也がきれいばいい、と思って鉄にしたのだが、すぐに龍也はいなくなってしまった。そして、残りの三人が龍也がどこに行ったのか話をしていると、龍也はいつの間にかさっきの場所に戻ってきていた。「鉄は無理だ。沈む。」と言っていた。鉄にしてすぐに沈んでしまったようだ。なので、他の三人が自分の方法で攻撃をしてみるが、隆の笛までもが効かず、まるで歯がたたなかった。そして、再び四人は逃走劇を始めた。

CHI・TOな天の敵

タコから逃げて数分、さっきまでいた陸地とは反対側の陸地に着いた。タコは雲海のなかでしか行動しないようで、陸地には全く上がってこなかった。四人はとりあえず安全になったように思えた。しかし、周りを見るとそれはますます消えていくようだった。周りはさっきまでの見た目が雲ではなく、緑色で植物のような見た目だった。だが、明らかに普通にあるような植物とは違く、また少し周りはジメジメしていた。だが、奥の方から「こっちに来てよ」。オロロロ、オロロロ、オロロロ。と少し気持ち悪いような声で呼びかけられて、少し怖かったが、きちんとした洞窟のような入り口があったので入ることにした。その穴は3個あり、とりあえず1個を選んで、四人で入ろうとすると、「みんな同じはだめだよ」。オロロロ、オロロロ、オロロロ。と聞こえてきたので分かれてはいることにし、どう分けるか、決めることにした。この声の主のオロロロ、オロロロ、オロロロというのが、隆の語尾に「っ」がつくのと同じように口癖なのか凄く気になって、拓也はまともに集中できていなかった。というより全く相談に参加していなかった。

そして結果的に決まったのは、龍也が右側、霧舞が左側、拓也と隆が真ん中というような分け方になった。「なんで俺と隆が同じなんだ！」と拓也は抗議したのだが、聞いていなかった拓也が悪いといわれ、渋々出発した。

右側の穴に入った龍也は奥へ奥へと進むごとに、オロロロ、オロロロ、オロロロという声が小さくなっていった。目的の場所とは遠くなくていつているのかもしれない龍也の場所はどんどんジメジメも酷くなっていった。しかし、それでも進むしかなく、龍也はもつと奥へと進んでいった。奥には一本の洞窟状だった道とは変わって、一

つの部屋のような場所があった。そこは上にも横にも凄く広い部屋だが、いたる所に植物の茎のような凄く太いものが生えていて、実際行動できるような広さはあまりなかった。すると突然、どこから「ハッハッハ、よく来たな、お前。」と声が聞こえてきた。アニメで良くあるパターンではここで悪の帝王がでくるといところだ。そして後から「ダメだよ。そんなことしちやっ。」と聞こえてきた、と思うとすぐに女の子が落ちてきた。龍也はキャッチして、その場に置き、最初の方の声の主を探すべく、どンドン茎を渡り、上の方へと登っていった。そして、龍也が発見した人は、黒いマントで身を隠し、黒い仮面で顔を隠した、悪の帝王のような人だった。龍也は呆気にとられていると、とつぜん男が消えた。それと同時に頬から血がでてくる。目にも止まらぬ速さで攻撃をしてくるこの男は何者なのか、分からずに龍也は戦い始めた。

一方、左側の穴に入った霧舞は、龍也のような部屋ではなく、コントロールルームのような部屋にでた。この部屋は植物の茎はなく、そして凄く涼しい部屋だった。周りを見渡してみると、大きなガラスのカプセルのようなものの中に一人の巨人がいた。この人は前にどこかで見たことがある、そんな気がした霧舞は助けてほしいそうにしていた巨人をカプセルからだしてあげた。すると、巨人は霧舞に向かって、大きく奇声を上げ、そして思いつきりビンタをした。ビンタといっても手のひらで全身が叩かれるようなものだった。巨人は暴走し始めたのか、周りにある壁を壊し、そして大きな穴をあけて、逃げていった。その数分後、三人の男が現れた。その男たちは巨人を洗脳しようとしていたらしく、巨人を逃がしたことに怒りを感じているようで、三人がいつせいに襲い掛かってきた。霧舞は同時に三人からの攻撃をまともにくらってしまい、その場に倒れてしまった。その後、彼らは巨人の逃げたと思われる方向へと走っていった。霧舞はすぐに立ち上がって追いかけようとした。しかし、ダメージは思ったより大きかったようで、立ち上がることも苦しくて

できなかった。

CHI・TOな天の敵？

その頃、二人で入っていった拓也と隆は全く部屋に辿り着いたりはず、洞窟の向こう側にでた。もしかすると、途中であった分かれ道で違う方に進んでいけば、龍也達と同じような部屋にたかもしれない。しかし、拓也達はそんな部屋があることは知らないのとおりあえず周辺を探索することにした。いかにも危険な雰囲気なため二手に分かれて、などということはせずに行動を始めた。まずは右側を見に行った。すると、周りにあつた植物達が突然声をあげた。「サル、サル、オロロローン、ロロローン」あの奇妙な声の正体はこの植物達だったようだ。しかし、サルというのは拓也達のことではなかったようだ。上から一匹のサルのようなものが襲い掛かってきたのだ。拓也はすぐに目隠しをされてしまい、その状況が分からなかったが、敵は一匹で拓也を先に襲ったので、隆には状況が理解できた。本当にサルのような生き物が拓也を襲っていた。しかし、サルのようなのだが、毛がハリネズミのようなチクチクした毛だった。そしてすぐに隆を襲おうとしてきた。それを防ぐために、隆は笛を吹いたのだが、ダメージを負ったのは、拓也と隆だけだった。サルには被害はなく、隆にも目隠しをしようとしてきた。だが、そのまま目隠しをされては、どうなるか分からないので隆は自分で戦うよりも拓也が戦った方がいいと思い、拓也の目隠しを外そうとした。だが、その目隠しは布などで出来たようなものではなく、機械でできていた。そして後ろでロックがされていて、全く外れずに隆までもが目隠しをされてしまった。そしてその後、頭を木のような棒で叩かれ、二人は気絶した状態でどこかに運ばれていった。

戦闘が始まった龍也は、男が強いことは分かっていたが、戦っていた。攻撃しようとしても、相手の3cm手前まで行くと、一瞬で消えてしまう。そして、その2秒後には背後から攻撃される。その

せいで、龍也は自分から攻撃することはできず、攻撃しようとはしているものも防戦一方になっていた。しかし、龍也は鉄という防御の方法がある。それで今までは全ての攻撃を防いでいた。両者とも傷はないが、圧倒的に不利なのは龍也だった。それでも戦い続けたその時、さっきまでふざけている様子だった男が本気になるのが分かった。そして次の一撃。前回までと同様に体を鉄にして防御をしようとする。しかし、鉄になるよりも少し早く攻撃があたった。しかし、一瞬当たっただけで龍也の体はすぐに鉄になった。そして、男は連続攻撃をするのではなく、すぐに離れ、「うおおおおお」と何か力をいれていた。その直後。龍也は体に触れられたわけもなく、鉄にもなっているのに、全力で殴られたような痛みをさつき軽く殴られたところを感じた。その力はとてつもなく一発の攻撃で龍也は気絶してしまった。

CHI・TOな二人組み

霧舞が目を覚ました時、全く知らない場所で目隠しと手錠をされて、イスのようなものに座らせられていた。周りからの声で、数人の人がいることが分かった。そしてその後に、「早く出せよ!!」という拓也の声を聞き、霧舞は自分だけが捕まったわけではないことが分かった。「いいだろう。あの巨人を捕まえてくるならば、四人のうち三人は逃がす。」今の言葉から龍也と隆もいるだろうという予測ができた。そして隆と思われる人を置いて行くことになり、三人は目隠しをはずした。霧舞と拓也と龍也……ではなく全く知らない人が目隠しをはずしていて、目隠しをしている人も知らない人のようにだった。そこで拓也は霧舞に外にでた後に「知らない人だからこのまま逃げるぞ!!」と提案をした。しかし、そのもう一人の人が、「お願いします。あれ俺の友達なんです。助けてください。」と言った。実際に巨人を捕まえなければならぬ状況になった原因は霧舞が巨人を逃がしたことで、霧舞は仕方なく手伝うことにした。「お前誰だ??」「私は稲妻イナズマです。アイツは神嘉ジンカといひます。」「そうか。まあ霧舞が悪いみたいだから協力する。」「ありがとうございますっ!!」霧舞達は三人で巨人を探すことにした。10分後大きいだけあって、巨人は簡単に見つけることができた。ここからどのように捕まえるかが凄く大変なことだろう。「稲妻、あんたは何ができるんだ??」「霧舞が作戦をたてるためにきいた。「雷を発生させられます。麻痺させれば、1分は動けません。でもあの巨人の大きさなら5秒ですね。」「5秒だと!?!」拓也がいった。「ならば5秒で俺と拓也がしとめればいいんだな??拓也お前なら余裕だろ??」「……あ……ああ!!」拓也は無理かもしれないがとりあえず霧舞は余裕そうに言っていたので、自分も余裕だというように強がってみせた。実際、霧舞もそんなことが100%できるという自信はなかった。しかし、今はやるしかないのだ。

三人はそれぞれ位置につき、一斉にかかった。稲妻が巨人を電気で痺れさせる。そして霧舞と拓也で捕まえようとした。しかし、巨人は2・6秒の時点でもう動きだしていた。「おい！！稲妻！！ふざけんな！！」稲妻は笑っていた。霧舞と拓也は巨人が逃げていくのを急いでおいかけているのに、助けてくれと言ってきた稲妻はまだ、笑っていて、走らずにゆっくり歩いていた。当然霧舞達は追いかけるのをやめようとする。「神嘉！！巨人がいたぞ！！」龍也の声が聞こえた。神嘉はさっきの逃がしてもらえなかった人ではなく、龍也、隆と共に逃がっている人なようだ。そして、龍也達も同じように神嘉に騙されているようだ。二チームは合流した。

「おい！！稲妻。そいつはお前の言っていた神嘉か！？」拓也が今にもキレそうだった。そして、龍也は、「神嘉、そいつが言っていた稲妻だな？？」と冷静に聞いた。二人は同時に大声で笑いだした。「何が面白いんだよ！！」「お前らは俺達の玩具になってたんだよ。俺らの作った島で何かたくらんでいるようなやつらがいたからな、少し遊んでやったんだよ。」「なんだと〜！？」龍也達四人はこの二人と戦おうとしていた。そして戦いが始まった。

CHI・TOな一撃

龍也達、四人はそれぞれ一気に攻撃を仕掛けた。だが、それは何も相手にはあたらず、龍也の鉄は神嘉の機械でできた右手に、拓也と霧舞は神嘉の出したロボットに、隆は神嘉の機械でできた左手によつて完全に防がれてしまった。「おい！稲^{イナ}、お前きちんとしてないから腕使うはめになっただろうが！！」神嘉は稲妻のことを稲と呼んでいるらしい。「あくめんどくせえなあ！！こんなもお前だけで倒せねえのか？」「倒せるけど一々この手使いたくねえんだよ。」「お前ら！！ふざけんなよ！！」拓也がキレた。そして拓也が一気に稲妻を倒そうとする。次の瞬間、四人の体は動かなくなった。稲妻の能力のようだ。そして、その動けなくなった無防備な体に神嘉は次々と攻撃をしてきた。その機械の手には様々な能力がついているようで、さつき龍也の攻撃を防いだ時は、手の周りにミニバリアを、隆の音を防いだ時には、音を消す能力を使っていたせいで、何も当たらなかつたらしい。そして、四人を殴っている時に色々な能力を発動してきた。龍也には、高温の手が襲いかかった。体を鉄にすることもできずにくらったその一撃は痛さも感じないくらい熱かった。そして、霧舞には低温の手が、隆は音波で攻撃をされた。どちらもダメージは大きく神嘉の強さが良く分かるような攻撃だった。そして拓也は、全く気づかない間に雷で攻撃を受け、そのまま倒れた。

1時間後、四人は稲妻の電撃で動けなくなった体が動くようになった。周りを見れば、ここは夢食島だった。稲妻達にここに戻されたいらしい。その後、鮫人間が少し手当てをしてくれたようなのだが、四人とも全く回復しているはずはなかった。龍也は腹にしつかりと、少し焼けたような後が残っていた。霧舞と隆は皮膚には大きな傷が見られないもの、体には相当ダメージを負っていた。そして、拓也

は、あまりの雷の強さに完全に記憶を失っていた。龍也達が誰なのか分からなくなっていて、そのうえ自分が誰なのかも、なんでこんな場所にいるのかも分からなくなっていた。三人は拓也に今の状況を説明をして、もう一度行くか、行かないかの選択をさせた。拓也は行かないと言った。

そして、四人は拓也を怨双島に置いていくことにした。途中で怨双軍団に出会い、拓也のことを説明し、そしてこの島に置いていくこともいった。するとキンが、「コイツも怨双軍団ってことにして、世話するからな。」と言った。龍也達は少し悩んだが、結果的にはいいということにして、また新たな旅へと旅立った。「いつかまた拓也を連れ戻しにこいよ」。その時にはもっと強くしとくからな。」

「キンが別れ際に叫んだ。「おう!!」」

CHI・TOな六人

三人になってしまった彼らは再び旅にでることにした。だが、今のままの戦力でもう一度あの二人に出会った時にはまた同じようなことが起こるかもしれない。なので、三人は新たな仲間を求め、そして自分達もさらに強くなれるように努力しながら冒険することにした。そしてこれからの目的地は賦族に出会ったあの場所だった。何をしに行くかというと賦族もそろそろ旅にでるといふようなことを言っていたので、二人組みのことを伝え、そしてトサチから修行のアドバイスをもらおうという目的だった。

時間をかけて、賦族のいるはずの所へ辿り着いた。しかし、そこには誰もいない。それどころか荒れ果てて、もう生活はできそうにないような状態になっていた。もしかするとあの二人がすでに来てしまったのかもしれない。三人はそんな心配をしながら、賦族なら生きているだろうと思い、近場を探した。すると、そこには20人以上の人が避難しているような場所があった。そして、何があったのか、賦族の人達を知らないかを聞いた。「……俺達の村にたった6人の集団が襲い掛かってきた。全員で対抗したが全く歯がたたなく逃げてきたんだ。」「村にあったものは全部とられたんだ！」「その6人の中に大きな特徴のある人はいませんか？」「龍也が聞いた。「俺が見たのは角と尻尾が生えてたやつと黒マントと巨人だったな。他に何か見たやついるか？」「俺は手が機械のようなやつを一人みた。」「俺なんか攻撃してたら何の特徴もないのに電撃をくらわされたぜ！」「稲妻と神嘉もいたということだろう。」「あとの一人見た人いませんか？」「透明人間がいた……と思うぜ。」「えっ！？」他の村の人が驚いた。「透明人間が見えんのか？」「霧舞が聞いた。「見えないものに殴られたんだ……。」「……。」「この軍団は、全員が大きな特徴をもち、

そして何かに長けている。そしてその強さは龍也達とは全く比べ物にならない強さだ。龍也はこんなやつらに今でも勝ちたいと思いつけていた。

そして賦族の話を聞くと山に逃げていった、と言っている人がいたので、三人はトサチと出会った雪山に久しぶりに行くことにした。トサチのいるはずの場所に行ってみるとその穴の中に賦族全員がいた。三人はトサチに言っただけでその中にいれてもらうことにした。龍也は話し始めようと思ったがあまりにもその穴がせますぎるので、大きくしてから話すことにした。本来は大変な作業だが、この全員が力をあわせてすぐに作業は終わった。「なんで拓也がいない?」「トサチが聞いた。「戦いで敗れた時に記憶を失って・・・怨双軍団と仲良くなったので拓也を預けてきた。」「なんだと!? そんな危ない戦いやつてどうする!! そして拓也をおいてくると何を考えるんだ!!」「ある修行をしていて仕方がなくなってしまったんだ。そして拓也はおいてきたが、怨双軍団に強くしてもらいいつかまた共に旅にでる約束をしたんだ!!」「そうか、それならいい。」「実は龍也はそのことは今でも後悔していた。一緒に旅をしてきた拓也を記憶喪失というだけでおいてきてしまったことは大きな失敗だったんじゃないか、そんな気がするらしい。」「ていうか怨双軍団と仲良くなつたとか凄くない?」「ザビツキユが言った。「意外とやさしくていい人達だった。ところで俺達がここに来ようと思ったのはもう遅かったみたいだが、雷の使い手と機械の手をもつ男が予想以上に強くて、色々な場所を荒らしているらしいから伝えにきた。」「お前らはいつらにやられたのか?」「マカブーがきいた。「ああ。アイツらの他にも四人いたらしいが全員が把握したいんだが・・・。」「龍也が言つとすぐにベツタが「巨人はデカいだけ。大きな分力が強い。だが、スピードは低いみたいだ。黒いマントのやつはお調子者。だが、本気になれば凄いスピードで襲ってくる。力はあまり強くないみたいだ。尻尾のやつは何か機械のようなものから色

々な生物などをだしてくる。あと一人は透明人間っぽいが見えないからよく分からない。」

「黒いマントのやつは弱い力で叩いてるみたいだが、何かの能力を使って体の中を攻撃する。触らないと発動できないみたいだな。雷のやつは電撃を使って麻痺などもできる。機械のやつは手の機械に色々な能力があるらしい。他に機械で作ったロボもだす。」ベツタと龍也の記憶で相当な情報を集めることができた。そして、これからどうするか相談することにした。

CHI・TOな作戦会議

龍也達と賦族はこれからどうするのか、相談を始めた。「とにかく今は離れたところに逃げるべきだ!」「いや、戦おう!」「逃げるならどこに?戦うならどうやって?」「逃げるならば少しでも遠くで見つからずに修行ができるところへ。」「いやそれならば怨双軍団のところに行くべきだ。」「逃げたらここに住んでる人達はどうするんだ。」「などと他にも様々なことを相談し、結果的には戦うか逃げるかという選択肢で逃げるを選んだ。そして逃げる場所は少しでも遠い所で、途中で怨双島を通ることができるような場所。今ここに住んでる人達ができるだけ多くの人に怨双島に着いてきて貰う。そういう相談結果がでた。なので少しでも早く村の人達と共に逃げるために今から村に戻り、行動を始めることにした。

急いで村に戻ってきた時には、あの六人は近くにはいないような様子だった。だが、龍也達が来たよりももっと後にもう一度襲われたのか生存者はほとんどいなく、もし生きていても怪我を負っている人ばかりだ。それぞれに歩いてもらうことは不可能に近かった。龍也達は全員で一人ずつ運ぶ事にした。トサチだけは二人を運び、ちようど生きている人は全員を運ぶことができた。しかし、その状態で歩いていたが、百メートルも人、一人を運ぶことは出来ず、どうにか楽に連れていく方法はないかと考えた。すると突然、生存者達がいきなり苦しみ始めた。何かに攻撃されて力尽きている様子だった。最初は元々怪我をしているからかと考えていたが、無傷だったナカチが倒れた。全員がそれを見て透明人間になる能力を使えるやつだと考えた。少しは心配しようとしている人もいたが、直後に全員が同じ方向へと逃げていった。見えない相手と戦っても勝ち目がないからだ。ずっと船などを使って逃げ続けていると怨双島まで逃げてきていた。全員が龍也の案内で怨双軍団のいた店に向かった。

だが、そこには誰一人もなく、そして修行をしていた場所に向かった。すると全員が真面目に修行をしていた。そのなかには拓也もいて、拓也は何か手から虫のようなものを大量にだしていた。賦族の女達は全員が気持ち悪がったが、男達はすぐに駆け寄って、「お前それどうやってやってるんだ?」などと色々なことを聞いた。そして龍也が「何があつたか順番に説明してくれないか?」と言うとキン達も集まつてきて、拓也の説明が始まった。「俺は怨双軍団にいられてもらおうかと思つていた。しかし、全員が音の使い手で俺はあまり強い能力は持つていない。だから記憶が回復してきて、霧舞の使つていた凄い量のものが入る袋を思い出した。そこで俺は虫や鼠などの生き物を使おうと思つた。鼠は繁殖が早いから良いと思つたし、虫も数がいれば人を一人食ふこともできる。だから俺はそういう生き物を戦いの道具として使うことにした。」「そうか・・・」

「龍也は怨双軍団に入ろうと思つていたということが少し悲しく思つた。」「おい、龍也。お前らが来た目的は拓也に会うためじゃなさそうだが、なんかあつたのか?」「そうだったな。俺らがここに来たのはなこの賦族っていうやつらの村が六人だけの敵に思いつきりやられたんだ。そいつらは全員が違う能力を持つていてその一人一人の能力が凄く強いんだ。だから、どうにかしようと思つたんだが、俺達だけじゃあなんともならなさそうだったからここに来たんだ。」「キンは答えた。「俺らはそういうことに協力する気はないんだが・・・。」

CHI・TOな食

キンは龍也達が何かあると自分達に何でも頼りだすんじゃないか
と思い、自分達で解決させようとした。「なんでだよ!! あいつら
を俺らだけで倒せねえよ!!」霧舞が言った。「霧舞、キン達はや
らないと言っているんだ。俺達は俺達で何とかしよう。」龍也がそ
うやって霧舞をとめ、ひとまず夢食島に向かうことにした。

夢食島の鮫人間のところに辿り着き龍也はある交渉を始めた。「
俺らはあそこから無事に戻ってきた。しかし、今そこで出会った敵
に狙われている。だからその実を5個だけでいいから渡してくれな
いか?」「それは無理だ。お前達三人以外の人間が食べてどのよ
うな使い道をするか分からない。その人間が正しい人間かどうか確
かめるのがあの修行だ。」「ならば俺達はここでその実を使う。そ
れでいいか?」「仕方ない。だが、お前ら以外のやつらで誰が食
べるかを先に決める。」「分かった。少し待ってくれ。」「龍也、隆、
霧舞以外に賦族から二人この実を使うことができるやつがいること
になる。」

そこでまずはトサチは使うということになり、残り一人誰が使うか
という相談になった。候補にあがったのは栗太、マカブー、ザビツ
キュ、クロトの四人だった。そこでこの実を使ってどんな能力を身
につけたいか一人ずつ聞いていくことにした。ザビツキュは「俺は
いらない。」「と言ったので候補から消え、残り三人になった。マカ
ブーが求めたものは「絶対的な攻撃力。」「栗太は「絶対的な防御。」「
そしてクロトは「水を操る力。」「だった。「水を使えるのは俺もだ
からいらないんじゃないか?」「霧舞が言った。「連携プレーがあ
るよつ。絶対的な攻撃力、防御力は応用することができないよつ。
そもそも栗太とマカブーは二人で連携がすでにできるんだから水に
しようよつ。」「隆が良い案を出した。そしてその案は採用され、結

局使うのは龍也、隆、霧舞、トサチ、クロトになった。

「この五人でいいか？」 「俺が聞きたいのは何の能力にするかだ。」 「俺は水を操る力。」 「植物を操る力。」 「大地を操る力。」 「鉄に色々な能力を付け加えたい。」 「俺は様々な物の形を自在に変えられるようにしたい。」 「クロト、霧舞、隆、龍也、トサチが順に言った。」「分かった。それならばその実を食べ、その能力を思い浮かべる。」 五人はその通りにやった。

終わった後それぞれが自分の能力が使えるか確かめることにした。クロトが海の水が手元に来るように念じると水がすぐに来た。そこにトサチが水が凝縮するように念じるとそれは小さな塊になった。クロトが念じて飛ばすと木に穴が簡単にあく程度の力があつた。霧舞は簡単に木の枝を伸ばしたりすることができた。隆は大地を自在に動かせるようになった。龍也は磁力を持った鉄や凄く熱い鉄が使えるようになっていた。五人は今考えたことは他にも色々と全て試してみた。するとそれは上手にいき、もしかするとあの六人を倒せるかもしれない程の力になった。そしてその後もう一度、怨双軍団のところへいくことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0187o/>

CHI - TO ADVENTURE

2011年3月13日08時15分発行